# WONDER WORD vol.1

November
2011

特集

# 東京再考

# WONDER WORD vol.1

November 2011

## 特集 東京再考


4 偶然性と戯れる場所の必要性 原田俊
6 ドビンチョーレについて @wintermuting
8 AKB48のファンはなぜ同じCDを何枚も買ってしまうのか izumi-
10 聖蹟桜ヶ丘 ～旧態依然の中の新発見～ 大多英之
11 東京と地ビール 深川要
12 ドイツ語経由、英語勉強法 秋庭奨
13 ご当地検定 ～中野ブロードウェイ検定が示す意義～ 大多英之
14 『死をみつめる心』を読んで ――リビング・デッドな社会―― 澤紀和
15 坂口恭平『ゼロから始める都市型狩猟採集生活』原田俊
16 試案、3・11後の想像力 ――経済、政治、倫理を突き動かす贈与の再考―― 佐藤大介
17 山崎亮『コミュニティデザイン』原田俊
18 西村佳哲『いま、地方で生きるということ』原田俊


## WONDER WORD REVIEW


20 ストレイテナー「STRAIGHTENER」 大多英之
21 石川雅之『もやしもん』8巻 深川要
22 羽田圭介『「ワタクシハ」』 原田俊
23 BUMP OF CHICKEN「宇宙飛行士への手紙」 大多英之
24 中沢新一『日本の大転換』 佐藤大介
25 村上春樹・河合隼雄『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』 原田俊
26 編集後記

# 巻頭言

WONDERWORD
@WONDERWORD_vol1

2011/8/14
11/3 の文学フリマに合わせて発刊される、雑誌「WONDER WORD vol.1」は、特集「東京再考」とレビュー ( 評論 ) の二部構成で編まれる予定です。
メンバーは編者兼執筆者の 2 人に、ゲスト執筆者多数でお送りしたいと考えています。
「特集：東京再考」の企画意図としては、普段、生活者として自分が見ている「東京」は全体の中の一面にすぎず、同じ場所にいるにもかかわらず、普段接する事のない人への想像力が働かなかったり、別の価値観で動いている人がいることを知らずにいる現状があります。
また、奇抜なことをやったとしてもそのクラスタ内では盛り上がるものの、全体には突き抜けることのできない問題もあると思います。東京の懐の広さというか、そうした「多様性に回収されてしまうこと、多様性を許容する環境に埋没すること」についても興味があります。
どうすれば同じ東京に住むまったく別の生活者のことを知る事ができるのか、もしくは、東京の許容する多様性に回収される事なく全体に届かせることができるのか。これらは同じ問題のような気がしています。
この特集で試みたいのは、こうした問題意識を起点とした多様な記事によって、読者の持つ多様な、しかし一面的な「東京」のイメージを塗り替える事です。読んだ後、この試みが成功していると感じていただければ幸いです。

2011/8/27
今回、ふだん個人で書いているブログでなく、紙でできた同人誌をつくることに挑戦したのは、紙という形に残るものの力がどれほどあるのか知りたかったのと、共同作業としての編集をしてみたいという思いがあったからです。
やりはじめて実感しているのですが、雑誌の方向性と執筆者の方向性をマッチさせていく、もしくは雑誌と執筆者のいいところを混ぜあわせる作業というのはとても大変ですね。執筆者の思いに沿いつつ、その記事のデザインをしていかなければなりません。
そういう意味で、ブログを書く事はとても個人的な行為ですね。書きたい内容の選択も、文章のクオリティも自分次第。自由だけれど、他者の視点が入りづらくなっている。
デザインし議論のなかで方向性を決めていく編集者と他者の視点をいれつつ独自の視点で文章を書く執筆者によって構成される雑誌と、個人的な行為であるブログでは、その読者への開放性に差が出てくるのは当然のように思えます。
自分の興味ある事だけが増幅されて聴こえる環境（エコーチェンバー）に陥りがちな今の時代、他者を含めての全体を描く編集という行為、もしくは他者の要請に応えての執筆行為というのは、それを打破しうるものかもしれません。
今回は「エコーチェンバーの打破」が東京特集の裏テーマだと思っているのですが、逆にエコーチェンバーに居る事を利用し尽くし、ある種の専門性を完遂することで突き抜けた、という事例も欲しいと思っています。オタクによる革命的な。
“ 東京 ” の多様性下では、エコーチェンバーに籠る事も、エコーチェンバーを打破する事も、等価であると考えていますので。
しかしながら雑誌「WONDER WORD vol.1」は、エコーチェンバーのもつ閉鎖的な気持ちよさを利用して読者と共犯的に盛り上がる雑誌を標榜していません。立ち位置の問題にすぎないのかもしれませんが、それは文学フリマのなかで独自のポジションを築く上でも大事なことだと思います。

特集

# 東京再考

京都の街を歩いた。友達の結婚式の次の日、仲間が雑誌で見つけた面白そうな古本屋に行った帰り。お腹もすいたし、ちょっとオシャレなお店でご飯でも食べようよ、と入ったカフェでその本と出会った。

翻訳家、青山南の選んだアメリカ文学について書かれた本。目次を繰ると、沢山の、読んだことはおろかタイトルもはじめて見るようなアメリカ文学が並んでいた。その中で、読んだ事のあるジョン・アーヴィング『熊を放つ』が取り上げられていた。村上春樹が訳したもの。つい嬉しくなって、ページをめくる。上下巻にわたる長い小説で、オーストリア・ドイツの田舎街から田舎町へのバイク旅を舞台に、主人公二人が永遠でない、大切な時間を過ごす物語で、その青臭さや、ところどころに出てくるユーモアがとっても好きで何回も読んだ本だ。この選集は、青山の選んだ小説の一部分が引用され、それについて青山のコメントが表記されるという構成のようだ。果たしてどの部分が取り上げられているんだろう。

そこで青山によって取り上げられていたのは、僕が読んだ中で、たしかに在ったと記憶はしているものの、それほど豊かなイメージを持っていなかったシーンだった。だがどうだろう。この本のなかで取り上げて、改めて一節を読んでみると、僕がかうて読んだときには浮かび上がらなかった鮮やかな色彩と、圧倒的な情感を持っているではないか。それはこんなシーンだ。「僕」と相棒のジギーは、動物園の動物たちを解放する計画を立てた。準備は万端。あとは今夜の決行を待つのみになり、世界がピンク色の夕暮れに染まるなか、ゆっくり時間を過ごしている。彼らは動物たちが解放されていく様を夢想している・・・。

あの小説の中に、こんな一節が在ったのか。たしかに在った。だが正直こんな美しいシーンだったなんて記憶していなかった。そして青山がこの長大な小説の中でこの一節を選んだことに感動を覚えた。しかもなかなか来ない料理を待ちながら何気なくめくった本の中にこんな出会いがあるなんて。

話は変わって、皆さんは Amazon.com を使われているだろうか。

僕はかなりヘビーに、それはもう、一週間で届く段ボールと、一ヶ月後に届くクレジットカードの明細で悲鳴を上げるほどに使っている。

欲しい本が絶対そろっている Amazon に魅力を感じれば感じるほど、実際に足を運んでも在庫のなかったりする街の本屋に魅力を感じなくなっていることに気がついた。

かといえ、六本木の青山ブックセンターや京都の恵文社一乗寺店など、その地に足をおろしたら必ず寄るようにしている魅力的な本屋も存在する。

これは何の違いによるものなのか考えたとき、「合理化によって進行してしまった均質化」が問題なのだろうと思い当たった。

わかりやすく言えば、大きな店舗が、売れ筋の商品を、安く、大量に仕入れることは「合理的」な選択だ。それによって利益率が低い製品や、一部の人にしか受けない製品の仕入れを辞めることはしょうがない。少ない労力で利益を最大化するために、書店はチェーン店化され、すべての店舗で売れ筋の本を売るように営業方針を揃え、接客はマニュアル化することだろう。こうして書店はコンビニなどと同じように「均質」化されていく。こうした利益最大化の取り組みは、大量生産とマスメディアによる宣伝がセットになり、情報

# 偶然と戯れる場としてのカフェ、創出の場としての図書館

文／原田俊

に対して受動的な人びとにビシビシと刺さっていた時はよかった。だが今や各人が能動的に興味のある情報を集め、価値観の近い仲間同士で共有する時代だ。

情報を収集する方法から選択する人びとにとって、均質的な店舗は退屈である。彼らを惹き付けるには、古今東西の商品を大量に取り揃えた大型スーパーか巨大ECサイトになるか、もしくは、ある関心領域に属する顧客向けに特化した商品を揃える小規模店舗にするしかないのであろう。

領域特化の店舗にしてもすべてをカバーしたECサイトにしても、継続的に取り組むべき課題がある。それはセレンディピティの創出というテーマだ。最近ではバズワードになっているが、セレンディピティとは、思いがけず得る貴重な情報のことだ。セレンディピティはある領域に特化したタコツボのようなコミュニティでは生まれにくいと言われている。それは自分の欲しい情報を探すための検索エンジンのような既存のロジックでは生まれないものだ。検索エンジンは調べたい対象には確実に僕らを届けてくれるが、僕たちが必要かもしれないが意識に上がっていない情報は提供してはくれない。それを生むためには偶然性や新しいものを意識的に取り入れる必要がある。

六本木の青山ブックセンターや東京駅の松丸本舗、京都の恵文社一乗寺店では書棚の本の配置に工夫がされている。

青山ブックセンターはあるテーマに沿って書籍がまとめられており、そこにはセレクトした人の感性が生かされている。ただ、レリバンス＝関連性によって本を並べるという手法はAmazonでも実装されている。それは協調フィルタリングと呼ばれ、Aという本を買った人は、同じように本Aを買った人が選んだ別の本Bを同じように購入する可能性が高いのではないか、という推測に基づいて、本を推薦していく仕組みだ。画期的な方法だが、皆が協調フィルタリングに従って知識を増やしていくと、ある領域に関心のある人たちすべてが同じ本を読むことになってしまう。そこにはノイズが発生するアルゴリズムが必要なのだ。

松丸本舗では、選者の視点によって書棚が構成されているが、そこには選者のノイズがそのまま入っているところに新規性がある。例えば、宗教の書棚に分厚いキリスト教の解釈を巡る学術書が在るかと思えば、ウンベルト・エーコ『薔薇の名前』、はたまた中村光『聖☆お兄さん』まで並んでいる。めちゃくちゃだ。だが面白い。自分の領域という殻に閉じこもり、関連する本のみを探していたはずが、書棚を巡ることにその殻が取り払われていく。

話は戻る。僕が旅先でたまたま入ったカフェで、たまたま置いてある本を読んで、そこに書かれている文章に感動する。これこそがセレンディピティではないだろうか。無駄も多いかもしれない。くだらない本ばかり読むはめになるかもしれない。自分の好きな作家や、興味のある領域の本だけ読んでいれば期待した内容通りで、期待が裏切られることはないかもしれない。でも、あなたは専門的になり、ひとつの領域に特化していくだけで、新しい驚きや感動に出会うことは難しいだろう。僕は本屋にはセレンディピティを期待している。

# ドビンチョーレについて

「あゝ！あたしはたうとうお前の口に口づけしたよ、ヨカナーン、お前の口に口づけしたよ。お前の唇はにがい味がする。血の味なのかい、これは？」（サロメ／ワイルド作 福田 恆存訳【岩波文庫】）

文／@wintermuting

本稿では、私が普段浴している、都内あるいは都内近郊におけるクラブやフェスやレイヴや、自室や車の中で奏でられる、あるいは、再生される、テクノやハウスやサイケと呼ばれるようなジャンルの音楽（以下ドビンチョーレ）と私と私の周りのドビンチョーレへの関わり方について述べる。

ドビンチョーレを「ジャンル」の集合体として呼ぶことはやや抵抗があるのだが、便宜上、ジャンルとして定義をする必要があるのでそうせねばならない。というのもドビンチョーレとドビンチョーレ以外の境界を考えた時に、私は音を振動として物理的に生成する楽器と電子機械としてリズムを刻むあるいはメロディを奏でるあるいはハーモニーを生成する電子楽器を用いるかどうかの違いというように明確に定義できる一方、ドビンチョーレの中でも様々なジャンル分けがなされているが、その定義やジャンル分けは百家争鳴、喧々諤々、十人十色であり、そのような分類を突き詰めることは往々にして不毛であるからだ。

そのような定義の話は脇において、ドビンチョーレ自体の面白みについて考えたときに、私は、かつて席する機会に恵まれた、丸山茂雄※1氏の講演を思い出す。講演の際の氏の「エンターティメントの本質はセックスとドラッグ」という趣旨の言葉が記憶に残っている。娯楽の本質は原始的な快楽の追求であり、時代を経て、社会的要請によって生まれたその変形を、今日我々は享受している。私はそのように解釈した。音楽の本質が快楽の追求であるとするならば、ドビンチョーレはその本質に現代社会における音楽を取り巻く環境を前提とし、極力近接しようとした結果、産み落とされた音楽と言える。黒人のゲイ・シーン※2がドビンチョーレの源流となったことはとても示唆的だ。

つまりは、ドビンチョーレを好むということは、音楽に対して本質的な快楽を追求する方向性を少なからず持っているということだ。しかしながら、音楽に対してそのように追求しない、する必要を感じない、人間も多数であり、個人的に言えば、目を瞑り音に併せ体を動かすという行動を他者の目を気にすることは阿呆らしいという考えに到るまでにいくらかの抵抗があった。この抵抗を如何に克服するか、あるいは克服するための、音と体を合一させる動機付けを得るか、ということが、ドビンチョーレを浴びるに至る一つの出だ。

※1 丸山茂雄氏
現SCEソニー設立、90年代の小室哲哉マネージャー、元ソニー・ミュージックエンタテインメント取締役会長。

※2 黒人のゲイ・シーン
90年代NYCのクラブ、パラダイス・ガラージなどのシーンを指す。詳細はラリー・レヴァン等で検索されたし。

※3 マズローの要求段階説
生理的要求が満たされると好かれたい認められたい超越したいとかの欲求が発生すること、くらいの意味で考えていただければ幸いです。

※4 罰祭
蛇足ですがDJの時喋で使っています。

※5 Manic Love
南青山の骨董通りにあったテクノ中心のクラブ。2005年11月13日閉店。O、T市Z主催のハードテクノのパーティー（Reboot）に筆者は良く行っていた。また、ゲイの客も多く、なんとなくピースフルな印象を覚えるクラブであった。現在年一回由比ガ浜で行われているマニアック・ビーチもその流れでゲイの客が多い。

※6 Reboot
http://www.moon-digi.com/reboot/ 参照

ドビンチョーレを快楽の追求の一形態とするのであれば、まず快楽とは何か、という話をせねばならない。ここでは、一次的欲求、三大欲求の充足が快楽というわけではなく、マズローの要求段階説[※3]を引いて、これらの欲求の充足が快楽である、というような定義としたい。特に、衝動と愛の欲求、承認の欲求に該当するレヴェルの欲求を満たすことが、ドビンチョーレを好む強い動機付けとなっていくのではないか、ということだ。

ドビンチョーレは、司祭[※4]の祈祷により、その場をエーテルのように、満たす。ドビンチョーレは時としてその場を支配する。それは単純な音量だけの話ではなく、意識をある方向に引っ張っていく。これがドビンチョーレの最高潮であり、本質であるように思う。この状況においては、この場を共有している人、人に対しての連帯感という生やさしい言葉ではなく、エーテルを介して個人的な意識は群体としての集合的な意識の一つ一つとなっているかのような錯覚に感じる。つまりは、自己承認は意識の連帯となって実現している。このような妄想、錯覚、幻想が、私が私の友人とフェスやらクラブに連れ立って行く動機付けになっているように思える。

一般論ばかりとなってしまったので、以下、固有名詞を出してみる。

私がドビンチョーレを聴くきっかけはさておき、ドビンチョーレを共に楽しむ友人が増えたきっかけは、某電子掲示板サイト内の、ドビンチョーレに類する音楽を愛好する者が集う掲示板群の中の、同好の者を募集する主題を持つ掲示板に自身の電子メールアドレスを開陳する場を媒介とした対話が嚆矢となり、私と複数人と主としてひねくれた世間一般としては主流でない価値観についての感想や意見を交換し、その延長で、まだ閉店前の Maniac Love[※5]で催されていた Reboot[※6]、そこでのアフター・パーティー[※7]や、開店直後の Agetha[※8]での Derrick May[※9]に連れ立って行き、WIRE[※10]や metamorphose[※11]に行き始め、少人数のレイヴにも足を向けるようになった。

このような切欠で友人が増えるというのは、今としてはおそらく珍しく、というのも当時はミクシィはまだまだメジャーな段階ではなかったと記憶しており、2ちゃんねるは mixi 的なコミュニケーションの一部を担っていた段階であったからこそであると思う。また、都内においてこそのようなコミュニケーションが成立する可能性が高いのは、場の共有ということは当然ながら物理的に同じ場に存在する必要があるのだから、その人口密度に比して都市部においてこそ成立の確立が高まるということは当然の帰結であった。その過程において、特定のコミュニティにおいてジャーゴンが用いられるように、ベースラインの良さであったりキックの硬さであったりフィルターによる低音の絞り具合について共通了解事項として会話ができるといった言語を用いた感想の交換（これは、共同幻想といってもよいかもしれない）もあって、このことがまた友人を友人と思う意識付けを密にするものであったように思う。これは当然ドビンチョーレに限った話ではないのだが。

以上、散漫な文章となってしまったが、この文章を目にした方がドビンチョーレに何らかの引っ掛かりを感じ、それに触れる一助となれば幸甚である。

※4 アフター・パーティー
通常のオールナイトで実施するパーティーの後に朝から始まるパーティーのこと。オールナイトでもキツいのにその後正午くんだりまで踊るわけであり、よほどの 24 hours party people 向け。Maniac Love では朝5時から始まるアフターパーティが週末頻繁に催されており、他のクラブに行った後にマニアック、という客も多く、アフターパーティの方が盛り上がっていることも多かった。また、地下2階のフロアから階段を上がった地下1階のバーカウンターでフリーのホットコーヒーが提供されていた。

※8 Agetha
新木場にある体育館のように馬鹿でかい STUDIO COAST を用いたパブリーなエントランスのクラブイベント、であるが、クラブの名前狭いで呼ばれることが多い。2002年にオープン。都心から遠い。渋谷からタクシーで 4000 円弱くらいか。渋谷駅から無料送迎バスが出ているが、クラブにバスで行くってなんだかなあ、と個人的には思う次第。遠いのでつまらなくてもすぐ帰って来れないのが結構地味にキツい。あまりテクノ向けではなくハウス向けな音の気がする。どうでもいいが大体ここから帰りは月島のジョナサンあたりで朝飯を食ってから帰っていた。

※9 Derrick May
デトロイト・テクノのイノベイターと呼ばれるコンポーザー、DJ。「Strength Of Love」がとにかく有名。Agetha がオープンした頃は毎週だか月一だかで DJ をしてた。

※10 WIRE
1999 年から毎年行われている屋内テクノイベント。石野卓球主催。電気グルーヴからテクノに入ったテクノ好きには欠かせないイベント。2002 年と 2003 年はさいたまスーパーアリーナで開催されたが、それ以外は全て横浜アリーナ。横浜アリーナは渋谷から乗り換えをしなければいけないのと、この時期はフェスが集中していることから筆者はここ数年足が遠のいている。あとやっぱり屋内だとあまり面白くない。

※11 metamorphose
2000 年から毎年行われている野外フェス。主催が Reboot にも参加している mayan であるため、テクノの DJ も多いが、それにとどまらず、様々なジャンルからの出演者が多い。TAICOCLUB に比べるとなんとなく固い（鉄板な）感じがする。

# AKB48のファンはなぜ同じCDを何枚も買ってしまうのか

文／izumi-

東京・秋葉原で秋元康プロデュースのもと「会いに行けるアイドル」をコンセプトに2005年に誕生したAKB48。

派生ユニットや姉妹グループを含め次々に拡大路線を続け、今や彼女たちをメディアで見ない日はないほどの圧倒的な知名度と人気を得ている。

彼女たちが歌うCDはこの不況においてミリオンセラーを連発し、CDシングル史上最高の初週売上を達成するなど常にランキング上位に位置し、エンターテイメント業界において他を圧倒する存在となった。しかし、世間では明るくクリーンなイメージがある一方で、この記録的なCDの売上に関してはネガティブなイメージもつきまとっているようだ。なぜなら「AKB商法」「秋元商法」などと揶揄される、同一タイトルのCDを「複数枚買い」するファンの存在が知られてきたからであろう。

筆者もかつてはどうしてもこの「AKB商法」が苦手であった。音楽というジャンルにおいて最重要である「楽曲」を軽視するかのごとく、封入の握手券でファンに同一のCDを何枚も購入させているように見えてしまい、イチ音楽ファンとしてどうしても許せなかったのだ。

しかし1年ほど前、ちょうど2010年の「第2回選抜総選挙」が行われたあたりだろうか、選挙の結果に涙し、その後も懸命に努力しようとするメンバーに共感し、AKB48に少し興味を持つようになった。当時はテレビに出演する彼女たちを見るだけで満足していたわけであるが、徐々に「実際に会ってみたい。」という気持ちが芽生えた。そしてその願いは、握手券がついたCDを購入することで叶うらしい、と。そこで1枚だけCDを購入した。もちろん「メンバーには会ってみたいが、AKB商法なんぞにハマるまい。」という思いで。

ところが、その1年後の現在、筆者は同一タイトルのCDを数十枚購入するまでに至り、誰の目から見ても「AKB商法」を支えるファンのひとりとなっていた。ファンとなった今でも「AKB商法」への苦手意識は消えないが、それも仕方がない、自分の「推しメン（＝推しているメンバー）」と握手がしたいのだ。それも1回では足りなくなってしまったのである。ファンとなってさらに実感したが、このAKB48の握手会、一度ハマってしまうとなかなか抜け出せない中毒性がある。

## 握手会の仕組み

確かにAKB48のファンはCDに封入される握手券を目的に、同一タイトルのCDを複数枚買うことが当たり前となってきている。以前は一部のコアなファンのみに見られたこのような「複数枚買い」が、現在ではライト層であるはずの中高生ファンまでも同じような消費行動に走っている。ではなぜそこまでAKB48の握手会はファンにとって魅力的であるのか。それを述べる前に、まずは「握手会」のシステムについて説明する。

AKB48の握手会には、数名のメンバーが全国各地を行脚する「全国握手会」と、メンバー指名制の「個別握手会」という2種類の握手会が存在する。注目すべきは、後者の「劇場盤」と呼ばれるCDに封入の握手券で参加できる「個別握手会」だ。

「劇場盤」はCDショップ等では販売されておらず、専用のサイトで抽選に当たると買うことができる。人気メンバーともなると朝9時から夜の9時まで開催されるこの「個別握手会」、ファンは会場で予め指定された時間帯

に、各メンバーの待つレーンに並ぶ、という仕組みになっている。握手会に訪れるファン層は幅広く、学生を中心に女性や親子連れも多くなっている。

「会いに行けるアイドル」をコンセプトにしているものの、メンバーのメディア露出が進み、なかなか以前のように秋葉原の専用劇場で彼女たちを見ることが出来なくなった現在、ファンにとってAKB48は往年の人気アイドルと同じように、手の届かない存在になってしまったように思える。しかし握手券さえ入手すれば、例えどんなに人気のあるメンバーでも至近距離で対面し、握手することができる。今やAKB48の握手会は彼女たちが「会いに行けるアイドル」というコンセプトを体現し、またファンもそれを実感できる貴重な場でもあるのだ。

## 握手会が人気のワケ

ではなぜAKB48の握手会は人気があり、またファンを離さない中毒性を持つのか。握手会といえば、言葉の通りまさしく握手をするためだけの流れ作業なようなものをイメージされることがあるが、先に述べたようにAKB48の握手会はそこに「時間」を与えた。握手券1枚につきファンに与えられる時間は大体5〜10秒。「たったそれだけ?」と思われるかもしれないが、それだけあれば握手はもとより、簡単な会話も楽しむことができる。また、同じメンバーの握手券を複数枚持っていれば、同時に使用することもでき、例えば2枚持っていれば1枚の時の2倍の時間、メンバーと握手をしながら会話することができる。ファンは握手そのものの行為よりも、むしろこの「会話」を目当てにしていることが多く、会場では「今日は何話そうかなあ。」といったファン同士の会話があちらこちらから聞こえる。

握手会において、メンバーとの会話の内容はなんでもいい。出演番組やライブの感想から、メンバーと共通の趣味について語ったり(例えば○○のアニメが好きと公言しているメンバーとその話をするなど)、時には人生相談まで様々で、ファンはみな思い思いの話題に花を咲かせる。

また、何回も足繁く通うファンに対しては、メンバーがそのファンの顔や名前を覚えることもあり、「あ。○○さんだ」と名前を呼んだり、「おー久しぶりー。」などと声をかけることがある。もはやアイドルとファンといった関係を超越して、友達感覚になってくるのであろう。筆者も名前を覚えてほしいなどという願望はないが、やはりメンバーと握手をする度に「おー今日も来たねえ。」などと笑顔で声をかけられると嬉しいもので、失礼とはわかっていてもタメ口で会話を楽しんでいる。

このように、ファンは握手そのものというよりも、実はこの「会話」にこそ握手会の醍醐味を感じており、直接話したい、伝えたい、共通の話題で盛り上がりたい、その一心で握手会に通う。ただでさえ人の手を握りながら会話するという非日常的な体験の上に、会話によってファンのメンバーに対する心理的な距離が、ぐっと近くなったように感じるのだ。

そして、このように握手会で得られる体験に、さらに相乗効果をもたらしているのが掲示板やブログ、そしてtwitterやmixiなどのソーシャルメディアである。若年層のファンが多いためか、ファンとメンバーとの会話内容は文章化され、しばしばネット上に投稿される。それを見た他のファンは「メンバーにこんな一面があるんだ。こんな会話もできるんだ。」と知り、さらに次回の握手会へのモチベーションとなる。それがある種の中毒性となり、また握手券を目的に「複数枚買い」を誘発させているのだ。

## ファンの急激な「総コア化」

以上のように、AKB48の握手会はファンの心を掴み、一部のコアなファンにしか見られなかった「複数枚買い」という行為が、ファン層の短い新規ファン層にまで浸透し、急激な「総コア化」が進んでいるのだ。それもリピーターを減らすことなく、さらに新たな新規ファンさえも取り込んでいく。

もちろんAKB48の現在の人気の理由は握手会だけではない。しかし、ファンとの心理的な距離を縮める握手会や専用劇場での公演といった草の根活動が、人気を支える大きな要因であることは間違いない。そこに運営の「劇場型」な仕掛け—ファン参加型の選抜総選挙、サプライズでのメンバーのチーム入れ替えや、じゃんけんでCDを歌う選抜をメンバーを選ぶじゃんけん大会との相乗効果により片時も飽きさせない仕組みができている。

実際はビジネスにおいて生み出された「作りもの」であったとしても、人と人という人間的な要素を軸に据えたAKB48は、共鳴や同一化を錯覚させる現代型エンターテイメントなのかもしれない。

**筆者プロフィール／izumi-**
1985年生まれ。福岡県出身の26歳。大学では社会学を学ぶものの、現在は出版社において法務を担当。
趣味はDJ。好きな音楽はクラブミュージック全般だが、AKB48の女ヲタとしての活動も欠かさない。「推しメン」は大島優子さん。
Twitterアカウント@izumi_32、AKB48専用アカウント@123akb48

# 聖蹟桜ケ丘

## ～旧態依然の中の新発見～

文／大多英之

ジブリ映画「耳をすませば」の舞台モデルとして、今なおファンが頻繁に訪れる聖蹟桜ヶ丘。京王線沿線の東京多摩地区にあるこの街は、駅前はショッピングのお店が多く立ち並び、少し歩けば丘が広がり、そこに閑静な住宅街が立ち並ぶ。映画の公開は1995年だから、もう今年で16年の歳月が経つことになる。特筆すべき何かがある訳でもないのだが、それにも関わらず、未だに多くのファンが訪れる。元々閑静で綺麗な街並みのため、散歩好き・街好きの方々の散策も多いようだが、映画のファンとして訪れる方は、各シーンの情景とリアルの情景を重ね合わせずにはいられない。16年の歳月を経てなおファンが繰り返し訪れるこの街の魅力は何であろうか？

先に回答をしてしまうと、この街の最大の魅力として挙げられるのが、「旧態依然の中の新発見」である。

京王線の特急が止まる駅と言うこともあり、駅前こそ多くのショッピングセンターが林立しているが、数分足を伸ばせばすぐに丘が広がり、その中に閑静な住宅街が立ち並ぶ。この丘の中の何の変哲もない住宅街こそが「耳をすませば」の最大の舞台なのだ。

ジブリ映画では情景描写の美しさにも比重をかなり置いており、その作品の多くがファンタジーの世界であったり、欧米の街を舞台にしていたりと、少々現実世界の我々からは遠い世界のように感じられるものが多い。

しかし、「耳をすませば」では、あくまで現実世界レベルの多摩の街が舞台となっており、他のジブリ作品と同じくその情景描写は秀逸だ。我々と最も近い現実世界をリアルに描くことで、この映画の世界観がより生々しく伝わってくるのだ。

そして、映画の中で主人公の雫がこの街の中を歩き回るのだが、地元に住んでいるはずの雫も「丘の上にこんなところがあるなんて知らなかった」と言うシーンや、聖司と地球屋の裏口から入る時に丘の上からの景色を見て、（雫）「空に浮いてるみたい」（聖司）「この瞬間が一番綺麗に見えるんだよ」と会話するシーンが見受けられる。

つまり、地元でありながら、今まで気付かなかった新発見、取り分け「景観」に関しての新発見が聖蹟桜ヶ丘という街には多いのではないかと思う。そしてそれが地元の方は勿論、遠方から訪れる方にも毎回新鮮にうつるのだ。

聖蹟桜ヶ丘散策のハイライトとも言えるのが、映画でも頻繁に登場する「いろは坂」であろう。駅から橋を1つ渡ってすぐに広がるそれは、この街のシンボルと言える。日光のものよりは規模こそ小さいが、「東京の街中にここまで派ないろは坂が」と思われる方も多いと思う。このいろは坂で映画の舞台も大きく動く。

筆者もこの映画の大ファンということもあり、数年前に何度かこの街を訪れた。目的はない。ただこの街の中を散歩したいのだ。これまで歩いてみたパターンを簡単に挙げると以下の3つがある。①雫が住んでいるアパートが、推測するに聖蹟桜ヶ丘駅の隣の百草園駅と推測されるため、百草園で降りて、聖蹟桜ヶ丘まで歩いてみるパターン。②小田急永山駅がちょうど丘を挟んで聖蹟桜ヶ丘の反対側にあるため、小田急永山で降りて、聖蹟桜ヶ丘まで歩いてみるパターン。③シンプルに聖蹟桜ヶ丘で降りて、丘を散歩し、戻ってくるパターン。

そして毎回発見があった。聖蹟桜ヶ丘の中心部が、丘から見る位置によって全く変わって見える。住宅街を歩いていても新たな建築物を発見できたり、3度目ともなると、「あの時に歩いたこの場所に繋がるのか」と少し自己満足的に感動したりする。

聖蹟桜ヶ丘のある意味何も変わらないノスタルジックな様相が、時に我々を原点に回帰させてくれる。そこには哀愁があり、癒しがある。そしてその変化の無い中にも毎回新たな発見・気付きを与えてくれる。そこには驚きがあり、未来がある。そんなこの街が、これからも地元の方・訪問者を魅了していくのであろう。

澤紀和

# 東京と地ビール

文／深川要

あなたは地ビールを飲んだことがあるだろうか。もし飲んだことがあるならば、普段飲んでいるビールとは全く味が違うことはご存じだろう。日本ではビールといえば、味がライトで金色の水のように飲めるピルスナータイプが「ビール」として定着しているが、ヨーロッパを中心とした世界各国では様々なスタイルのビールが飲まれている。確かに今ではピルスナーを中心としたラガータイプのビールが世界でも主流で消費量も最も多いが、日本ではあたかもビールがそれしかないかのように扱われることがあまりにも多いように感じてしまう。「様々な種類の中からピルスナーを選ぶ」のと「他に選択肢がない」のとでは、ビールの楽しみ方も大きく違うのではないだろうか。

日本の法律では1994年以前は、年間で2000kl を製造できなければビールの製造免許が取得できなかった。そのためにビールは大手のメーカーでなければ製造できず、その大手メーカーが作ることを選んだのがピルスナーである。しかし、1994年に法改正が行われ、年間製造量が 60kl まで引き下げられたことにより、地ビールが盛んに作られるようになり、現在では日本でも数百にわたる地ビール蔵が存在する。

地ビールでももちろんピルスナータイプのビールが作られることもあるが、他にもアルト、ベールエール、IPA、ヴァイツェン、ボック、スタウトなどなど、本当に様々な種類のビールが日本でも作られている。しかし、それを飲める場所というと、なかなか限られてしまっているのが残念なことだ。

地ビールは土地の名産品のひとつのように扱われることが多い。土地の名産品という意識があるからなのか、産地では他の土地の地ビールを提供しようなどというお店もあまりない。しかし東京は違う。各地の人が集まるからだろうか。経済の中心地だからといってしまえばそれまでだが、東京は物の流通量が圧倒的に多い。その中にはもちろんビールも含まれていて、東京では様々な地ビールを飲ませてくれるビールバーが実は結構存在する。

そして東京には、様々な地ビールが流通しているだけではなく、「東京の地ビール」も存在するのだ。浅草はアサヒビールのお膝元で地ビールを作っている「隅田川ブルーイング」、高円寺の住宅地の一瞬普通の家かと間違うような「高円寺麦酒工房」、天王洲で海に面したテラスで食事も楽しめる「T.Y.HARBOR BREWERY」など、各地の地ビールに負けないビールを作っている蔵が東京にも存在する。そこでふと思うのは、「東京で原料って作れるのだろうか」ということである。「地ビール」というくらいだからその土地のモノを使って作るのではないか？もちろん地ビールのなかにはその土地の原材料を使っているものも多い。しかし、地ビールの原料は海外から輸入されることも多いのが事実だ。この記事を読んでいる人の中には、「それじゃ地ビールじゃないじゃん。」と思う人もいることだろう。そう、「地ビール」という言葉自体が誤解を招く。言葉自体は、「地酒」にちなんで誰かがつけたというのが正直なところらしく、そもそも「その土地のビール」という意味ではない。英語圏の国では小規模醸造所のことを「micro brewery」、そこで作られるビールのことを「craft beer」と呼ぶ。地ビールとは「小規模醸造所で作られる手工業の工芸品」ということだ。言ってしまえば、ビールが好きな人たちが自分たちの好きなビールを追及した結果、様々な原料を使って作り出したビール、それが地ビールである。ビールは「土地」に帰属するのではなく、「作り手」に帰属するのだ。

ここまで駄文を重ねてきたが、正直に言えばビールを楽しむのには飲むことが最も重要だ。知識は後回しで良い。もちろん知ると楽しいことはあるけれども。飲めばわかるさ。さぁ、東京で美味しい「craft beer」を楽しもうじゃないか。

# ドイツ語経由、英語勉強法

文／秋庭奨

最近は、もはや外国語の1つや2つ操れることが普通の時代になってきている。少し前までは「外国語＝英語」というイメージがあったように思えるが、昨今は、そのようなイメージも薄まってきて、中国語や韓国語、フランス語等という具合に様々な国の言語を学ぶ人が増えてきた。

ビジネスにおいては海外とやり取りをする上で、外国語の中でもやはり英語ができることは必須事項で、もはや避けては通れないとは言っても過言ではないだろう。その為、会社では若手社員からベテラン社員まで皆必死に語学を勉強している。

事実、私もそんな会社員の1人で、業務の傍らで英語の学習に勤しんでいる。しかし、日本人にとって英語を学ぶことは他の国の人々よりも難しいと私は思う。

というのも、まず使用している文字が違う。英語はアルファベット、日本語はひらがな、カタナカ、漢字で、私たち日本人はアルファベットと似ても似つかない文字を使用している。しかしこの点は、例えば中国人や韓国人も同じ境遇にいるので、とりわけ日本人が外国語の習得し難い理由にはなりにくい。

次に考えられるポイントとして、文法が挙げられる。日本語は「主語＋目的語など＋動詞」という構造が一般的であるが、英語は「主語＋動詞＋目的語など」というように日本語と基本的な順序が異なっている。

そして更なる日本人の弱点は、日本語は「あ、い、う、え、お」の5つの母音しかないことである。これは何を意味するかというと、英語には少なくとも5つ以上の母音があり、日本語にはない母音の音の聞き分けが難しいということである。この点から、日本人は英語の発音が良くない、また聞き取り能力も低いということが言える。

簡単な説明ではあるが、以上の3点が日本人が英語習得する上でのネックとなる部分であると私は思う。

それではここで焦点を英語からうってかわってドイツ語に当てたい。なぜドイツ語を選んだのか。その理由は、私が学生時代、ドイツに留学した経験があり、ドイツ語の知識が多少持ち得ている為で、英語の時とは違った角度からアプローチしてみたいと思う。

ドイツ語は文法こそ英語より複雑であるが英語と似た単語が結構あるので、ドイツ人にとって英語は、少し学習すれば問題なく使える言語であるという。中学生くらいから何年も英語を勉強して結局ものにならない日本人にとっては羨ましい話である。私の体験談なのだが、ドイツ語を学習してから英語を学習し直すと、ドイツ語が複雑が故に英語がとても簡単に見えてくるのである。急がば回れ、英語ができるようになりたい方は、敢えてドイツ語から学んでみてはいかがだろうか。

では逆にドイツ人が日本語を習得することはどうだろう。事実、前述の通り、日本語はひらがな、カタカナ、漢字があり、更に敬語もある。なにより日本語は単語や動詞などの間に助詞を伴って文章が成り立っている為、英語やドイツ語のように単語を並べるだけでは、内容が理解しがたい。こう考えてみると、いかに日本語は難しい言語であるのかが見えてきたと思う。

さて実際、外国語を習得する上で一番大切なことは、とにかく使う、話すことである。しかし、スクールに通うにも結構なお金がかかるし、だからといって1人で会話の練習をするのは至難の業である。だがなんと、こうした問題を解消する学習方法がある。それは日本語を習いたいドイツ人にドイツ語を習いたい自分が教え、その対価としてドイツ語をその相手から教えてもらうという方法である。これならお金はかからないし、互いに損になる要素はない。そして私もこれを実践してドイツ語を学んだ。

以上、駆け足であったが日本人である私の見解である。では外国人の意見はどうだろうか。実際の生の声を聞いてみたいと思うので、日本にあるドイツ人のコミュニティに足を運び、インタビューをしてみたいと思う。

# ご当地検定

## ～中野ブロードウェイ検定が示す意義～

文／大多英之

2007年頃、地域活性化の目的で、ご当地検定ブームが巻き起こった。全国でもかなり数が誕生し、そのほとんどが各地域の伝統・文化を深く知り、その案内のできる人材を育成するものだ。ただ、この検定の資格が取れたからと言っても、就職活動などでは正直効き目がなく、実用性としては乏しい。それでも当時はメディアでもかなり取り上げられ、その人気は一時日本全国に広まっていった。

東京でも「江戸文化歴史検定」・「東京シティガイド検定」・「多摩・武蔵野検定」などかなりな数のご当地検定が存在する。多様性に満ちた東京という街を改めて知り、それを周囲の皆に伝えていく。この趣旨に大きく賛同したい。

しかし、ご当地検定自体の受検者数は年々減少傾向で、採算も合わず、現在では終了してしまっているご当地検定も多い、という記事をあるWEB上で見つけた。2010年8月付けの記事であった。このままご当地検定は収束の方向に向かうのかと思った矢先、ある興味深いご当地検定を知ることができた。それが「中野ブロードウェイ検定」である。

中野ブロードウェイ、サブカルチャーの聖地である。一言で言ってしまえば、「自由」「何でもあり」と言ったところか。漫画・アニメ・フィギアの類のお店で溢れ返っているイメージが強いが、実際には飲食店・アパレルショップ・楽器屋など、そのフォーマットのなさには驚かされる。秋葉原は街全体が「サブカル街」として成立しているが、中野ブロードウェイは、このビル一つにその全てが集約されている。ビル内がとにかく「カオス」なのである。

「こちら葛飾区亀有公園前派出所」の159巻でも中野ブロードウェイを取り上げている回があり、両さんが秋葉原との違いを分析している。両さんの解説によると、秋葉原は最新ゲーム・最新アニメ・最新アイドルと言った「未来志向」なのに対し、中野ブロードウェイは、古い漫画・アンティークグッズ・懐かしのおもちゃと言った、「ノスタルジー文化」で成立していることを指摘している。

設立は1966年と、意外とその歴史は古い。ビートルズが来日して日本武道館でライブを行った年でもある。45年の歳月を刻む施設であるが、ここ数年の動向として、2008年には今までいそうでいなかったイメージキャラクター「PIPI」の誕生、2009年には「のせすぎ！中野ブロードウェイ」と言う初の専用ガイド本の刊行など、その動向が地味に活況を呈している。

そんな中野ブロードウェイで、日本初の商店街検定である中野ブロードウェイ検定が、2009年12月に実施された。中野ブロードウェイを深く理解し、その文化を次世代に残すこと、地方や海外などから訪れる人に魅力を伝えられる人材育成を目的としているようだ。

ご当地検定ブームが収束に向かう中、この検定は誕生した。先ほど2010年8月付けの記事でブームの収束を知った旨を記載したが、何と2011年2月という直近にも第二回の中野ブロードウェイ検定が実施されている。

中野ブロードウェイ検定も目指す目的は既存のご当地検定と全く同じだ。しかし、超ニッチな検定内容であり、そのマニアック性に心惹かれる。

筆者自身、ご当地検定というものを受けたことがある訳ではないのだが、各検定に共通する、「各地域の文化を理解し、伝えていく」という趣旨に大きな意義を感じている。その検定が風化しつつあるというのであれば、中野ブロードウェイ検定に匹敵する程の超ニッチなご当地検定を増やしていくというのは1つの打開策として有意義に思える。

500人が受ける検定よりも、50人が受ける超ニッチ検定を10個創り出していく。この50人というのは多様性の中の一部であり、当然ではあるがこの一部こそが多様性を創り出していくのだ。

中野ブロードウェイ検定は多様性の中の一分子として、大きな役割を担っているのかも知れない。

# 『死を見つめる心』を読んで - リビング・デッドな社会 -

文／澤紀和

## Ⅰ．はじめに

3.11 の東日本大震災の悲惨な光景は、半年たった今でも、鮮明に覚えている。この 3.11 の経験は多くの人に、文字通りある影を落とした。それは普段、意識の深い底に沈め、忘れようとしている「死」という影だ。この心境に置かれたとき、私がふと思い出したのは『この死を見つめる心』という一冊だ。

この本は宗教学者である著者が癌を宣告されてから、死の恐怖と向き合うことで、死ぬことはどういうことか、そして、生きることはどういうことなのかを、言葉巧みに綴った一冊である。

事の始まりは、著者が米国の大学で客員教授として滞在していたときに、自身が癌であることを告げられることから始まる。それから、彼は何十回と手術をし、なおもがむしゃらに働く中で、死という暗闇を凝視し続けた。彼は宗教学者であるからこそと言うべきなのか、死後の世界を肯定することなく、自分という存在はこの命の営みの中にだけあると言い切っている。そして、死の恐怖から逃げるのではなく、死というものは何かを考え始めるのだ。その暗闇を凝視し続けたことで得られた「死」への答えがこの本に描かれている。

## Ⅱ．「よく生きる」ということ

結論を言ってしまおう。彼の導き出した死の恐怖への克服は、「よく生きること」であった。それは、日頃から、ある一つの目標をもって精一杯生きていくことだという。もちろん、それは場当たり的な欲望や願望ではなく、生涯に渡って信念を貫いていくことや成し遂げていくようなものであるという。

この答えを前にして、あなたはどう感じただろうか。私は、正直なところ、目新しさはなく、なんとなくわかっていることを言われた気がした。しかし、その「なんとなく」に、現代人と死への関係性が集約されている。そして、この「なんとなく」の意味をもう一度考え直す必要があるのではないかと彼は、現代人に問いかけている。

この本の『現代人と生死観』という手記の中で、近代文化は死を忘れさせる文化だと彼は言っている。近代は科学と技術により、機械の力を動力源としている。人間が社会というシステムの歯車であるようなイメージを思い描いたことのない者はいないと思う。近代社会の中で、もし、その機械が壊れてしまったら、すぐさま新たな機械に交換するに違いない。近代の生産過程を支えるのは常に高能率を保つ健康なる機械である。つまり、彼が指摘したいことは、近代は性格上、健康な人間だけを標準にして出来上がっている社会であるという点だ。この生者の社会の中では、誰も死について考えることもしなければ、考えることさえも後ろめたいことであるとされてしまう。我々は自ら影を消し去って、白昼の中を生きようとしているに過ぎない。

## Ⅲ．影を「取り戻す」

この手記は 1980 年の高度経済成長期の真っ只中に書かれたものである。この手記から半世紀たった我々が生きる社会では、さらなる変化が起こっている。「リスク社会」や「リキッド・モダニティ」、「消費主義社会」などと言われる現代社会では、我々は、さまざまな不確実性に押し潰され、不安定な労働環境と市場原理主義的な幸福の中で生きている。この刹那的な煉瓦を積み上げるようにして生きていく社会の中で、死と向き合うことはさらに難しくなってしまっている。

現代は活発に動き続ける。洪水のように押し寄せる情報と、日々様変わりする価値観、そして、絶え間なく流れる労働力。その中でも、多くの人々が暮らす東京は生者の中の生者が暮らす社会と言える。

しかしながら、伝説の中で吸血鬼と呼ばれる存在がそうであるように、影のない人間は、もはや生者ではなく、亡霊のような存在なのかもしれない。我々は自身に光を当て、その影をしっかりと見つめることで、「よく生きる」ことの意味を考えていかなければならないのだろう。

## 坂口恭平
## 『ゼロから始める都市型狩猟採集生活』

文／原田俊

この本はまず、なんの前提や留保なしに、自分が着の身着のまま都市に放り出されてしまう状況に想像力を働かせる事から始まる。いきなりすごいシチュエーションだ。この殺伐とした都市の中で果たして自分は生き残っていけるのだろうか。でも、この問いは別に自分が極限状態にならなくとも、日頃ぼんやりと考えていることでもある。だが安心してほしい。この本はタイトルに「ゼロから始める」とついているだけあって、その疑問に対してひとつひとつ不安を取り除いていってくれる。慈善団体の提供してくれる温かいご飯。教会やイベントでもらえる衣服。暖をとれる段ボールハウスの作りかた…

「大丈夫、どんな状況になってもあなたは生きていける」都市で暮らす僕らはこの言葉が欲しかったのかもしれない。

とはいえ、生きていけるといわれても、今この生活を簡単に捨てる事なんてできやしない。平凡な生活をしていると思うどんな人だって、受験勉強や就職活動、会社での修行などなど、多大なリソースや代償をはらってここまできているのだから。でも、そんな自分が積み上げてきたものが崩れないようにと、ちょっと敏感になりすぎてはいないだろうか。守る事に息苦しさを感じていないだろうか。この文章では、都市型狩猟採集生活をみる事で、日々の生活に追われて固定化してしまっている視座をずらす事、それによって生まれる解放感について書いてみたいと思う。

### レイヤーに分かれている都市の人びと

いかに人びとが自分の生まれた世界の常識や価値観にしがみついていることか、それはレイヤーという言葉に集約されていると思う。レイヤーとは社会階層のことを指している。このレイヤーが他者理解を妨げていたものだし、その道を踏み外さないようにと圧迫感を生んでいるのだ。レイヤーを捨てる事は勇気が居る事だが、けっして悪い事にはならないはずだ。

僕の話になるが、大学生の時友人3人でヒッチハイクで屋久島まで行った。高速道路のサービスエリアで乗せていただいては次のサービスエリアへ。夜はサービスエリアの店員さんに分けていただいた段ボールを敷いて寝た。車に乗せてくださった方は皆親切でご飯をごちそうになったり、お風呂に入れさせていただいたりした。自分が路上生活の体験をしたことがあるから彼らの気持ちがわかるなんて胸を張るつもりはないが、この体験を通して思ったのは、あまり他の人がやらないことをやっているからといって、他の人は冷たくないし、興味を持たない人と同じ数だけ興味を持って接してくれる人がいるという事だ。

### 別のレイヤーに自分の身を置く事で見えてくるものの存在、〈都市の幸〉

坂口は、山に木の実が自生し海に魚が育つように、都市に自然と増える実りを〈都市の幸〉と呼んでいる。ここでいう都市の幸とは大都市が日々排出する多様なゴミの事だ。だが広義に捉えれば、経済システムが肥大化した事で発生している都市の幸はゴミだけでなくさまざまな余剰の事だろう。売れるかもしれない、要るかもしれない可能性のためにストックされては廃棄されていく都市の幸。それを売って食べたときのリスクを考えて消費起源を設定し、数分経っただけで捨ててしまうという、リスクのルールによって行われている無駄。自分にとって必要な量を知る事、知らないが故に便利さを求め、システムと切り離せなくなってしまっている自分がいる。知ることで切り離すことができる。

### 狩猟採集生活者はコミュニケーション強者

都市で狩猟採集生活を送っていくには頭をつかい、コミュニケーション力を行わなければいけない。コミュニケーション力、対人関係構築能力に劣る人にとってこの生活は厳しいのではないか。まるで都市型狩猟採集民は都市に寄生している、と反発する人もいるかもしれない。でも、それは自分は「持てる者」で「持たざる者」ではないと勘違いしているから言える事なのだ。いまは身一つなのだ。あなたを守るものは何一つない。都市（＝自然）の脅威には知恵を使い、生きるための仲間をつくり、そこにあるものすべてを利用しなければ生き延びる事はできない。正反対の生き方にみえるが、企業人として企業の恩恵にすがって生きる方法と、この都市の幸を利用した生活は遠いようで似ている。どちらも都市の存在を前提としている。もっとも、企業システムは多かれ少なかれ「要求」する。ある時は少量、そしてある時は何もかもを。そしてあなたはそれを拒むことはできない。

### この「生活」は選びとるものなのだ

冒頭で衣食住の確保について書かれていたが、最低限の食事と衣服が欲しければ、慈善団体から頂く事はできる。働く必要はない。でも自分がその状況に満足せず、働いたり、仲間を募ったりすることは、すべて自分たちが選びとっているものなのだ。だから狩猟採集民たちは生き生きと生活している。いま、会社員として働いている自分も断言できる。この仕事や働き方が辛かったり、我慢できないものなのであれば、辞めてしまっていっこうにかまわないのだ。むしろ、辞めてしまうと元に戻れないと考えるから風通しが悪くなるのだ。もちろん辞めるともとに戻れない今のシステムにも問題があるのだが、こうしたシステムに居心地が悪いと考えるのであれば、これを選ばない事だってできる。つまりはイマの働き方やシステムに乗っかって生きているのは自分が選択した結果なのである。これを考えると、とたんに今の仕事のやり方や生き方に疑いを挟まざるを得ない。自分の人生の大切な時間を使ってこんなことをしていていいのか。ただ流されるように人生の時間を使っていていいのか。その点、彼らは違う。自分が生きるため、生活していくために、自分ができる事を自分で考え、工夫して生活を進めている。

「そのとききみは、政治、経済、労働、あらゆるものから解放され、きみ自身しかできない生活を獲得するだろう。」

人間の土地所有を疑い、水道代を疑う姿勢。住宅費がタダになった社会でひとびとがどうなるかに想像力を働かせる。これこそが常識の自明性を疑う生きた社会学ではないか。

# 試案、3・11後の想像力

## - 経済、政治、倫理を突き動かす贈与の再考 -

文／佐藤　大介

離散の危機にある人々の奪われた日常と強いられた勇気を前にして、何かが大きく断ち切られた気がした。

人知をはるかに越えた自然の猛威、エネルギーを大量消費する便利な社会や生活のあり方への疑問、持続的なコミュニティの必要性。平成を災前と災後に分かつ巨大な断層を前にして、日本は抜本的に変わらなければいけない。強く、思った。

でも、どうやって変わればいいんだろう？

ちっぽけな個人に何ができるだろう？

考えた結果、まず僕ができることはボランティアだった。

ここでは、僕が石巻市でのボランティア活動を通じて感じた、贈与の可能性を再考したい。ボランティアは、一般に「助けること」と「助けられること」と区別されている。しかし、ボランティアには人助けを通じて「自分」と「他人」の立ち位置がフラットに融和してゆくような、わけあたいの循環があるのではないか？贈与とフラットな関係性から生まれるコミュニティが災後の鍵になるのではないか？

贈与社会のつながりとは、モノを受け取るごとに発生する人間同士のつながりだ。資本主義社会は、モノと所有者との関係を断ち切った上で市場の原理を前面化する。ただその中でも様々な場面を通じ、心のつながりを維持しようと人の「たましい」を揺さぶる時がある。僕が石巻市で感じたものは、合理性や整合性を基底とする資本の原理とは異なった、「生体圏を根底で支える贈与」に触れる、どこか懐かしいものだった。

GWの長期休暇を利用して、ピースボートのボランティア活動に一週間参加した。当時は、一週間分の水と食料から作業服まで全て自前で用意する必要があり、スケジュールもハードだった。ベースキャンプ地の石巻専修大学では、朝7時30分から全体ミーティングを行い、各自の担当地区に分かれて夕方までみっちり作業。

ささやかな手助けと思ってボランティアにきたものの、正直とても疲れる。休みたくなる。それでも頑張れたのは、毎晩心を救われるたくさんの出来事があったからだ。

その一つが、ボランティア向けの炊き出しや支援活動だ。医療団体や那須塩原市の社会福祉協議会の炊き出し、広島からきた出張足湯温泉など、たくさんの支援があった。

ボランティアとは不思議なもので、「支援すること」と「支援されること」の両方の立場に身を置いてみると、ボランティアの意義を改めて実感する。線引き自体は全く大切なことではなくて、ただ「お互い様」の流れに呑み込まれてゆく感覚を肌で感じるのだ。誰かに助けられたから今度は自分も誰かの力になろう、明日も頑張ってみよう、といったように。特定の「誰それ」じゃない、匿名の「誰か」からの支援が心から「有難い」と思える。自分という存在が、まるで巨大な運動の中で溶け込む、生き生きとした分子のように感じるのだ。「自己実現と承認の供給源」「精神的報酬と社会的承認」「興味本位」ボランティアを郷揄する言葉が、まるで「どうでもいいものとして」気にならなくなっていく感覚。

誰かと誰かが同じ循環の中でつながっていて、善意をわけあたい育んでゆく仕組み。その流れのなかに自分も一人として含まれている実感。それを誰かにつなげてゆきたいと思う気持ち。威信や信条、愛情、友愛といった人格性に関わる生命的な力のあらわれが量子的な雲となって躍動していく力。様々な回路を通じて、人は人同士の心のつながりを維持して、結び付ける働きが社会には原理的に内在しているのかもしれない。それは、人間の無意識の領域に眠った、「懐かしいもの」といってもいい。

エネルギー、住まい、食、そして人と人とのオープンな関係性の構築。自然には負荷をかけない持続的な暮らしと地域空間の基底にあるコミュニティの再考が、今求められている。豊かな社会を作るために、贈与とフラットな関係性を再考してみてはどうだろう。僕はボランティアを通じて、コミュニティの必要性と、組織を根本で支える「贈与の再考」を強く感じた。具体的に贈与とコミュニティをいかにして結び付けていくか、組織と実践の問題だがこれは追って描いていきたいと思う。ちなみに、2011年8月15日発行の「THE BIG ISSUE」の173号に「持続できるコミュニティ」としてコレクティブハウジングや琵琶湖のエコビレッジが特集されている、関心があれば読んでほしい。異なるシステムと人が混ざり合う場所に、大きな変化は起きると強く実感する特集だ。「外に開かれたエッジ」は「歓待の気持ち」を作るという。僕は、この表現がすごく腑に落ちた。歓待の気持ち、という無意識の「原理」に。

贈与を立脚点にすえて、経済学と社会学を書きなおす野心は、M・モースによってすすめられた。経済も政治も倫理も美や善の意識をも包み込む「全体的社会事実」を深層で突き動かしているのが、贈与の原理にあることを彼は「贈与論」で示した。贈与の神秘も、交換の悦びも、とらえどころのない流動的な力の原理がある。一人一人の行動の変化が、誰かとつながり、その流れの中で温かさ、温もりの心を養っていくのかもしれない。

贈与のつながりは、確かに「異質」かもしれない。しかし20世紀に打ちたてられた巨大な野心の実践、その後継を担うのもあながち間違ってはいないと思う。なぜなら、災後を担う想像力は、ある程度には柔軟で可能性に溢れていた方がいいと思うのだ。

## 山崎亮

# 『コミュニティデザイン』

文／原田俊

当初、この東京特集を考えるにあたって、コミュニティの衰退と「無縁社会」の進行というのは憂慮すべき重要なテーマだと思った。都市においてひとびとは「他者に対して無関心であるという態度をとること」を生き方の作法として身につけてしまっている。コミュニティを復活させる、という対応策が必要だ。しかし、そのクリシェを具体的な行動に落としていこうとすると、途端に言葉に詰まるのが普通の人の姿ではないだろうか。実際僕も人びとが集まるような施設をつくって、コミュニティに活用してもらうことくらいしか思いつかなかった。これはかつての“コミュニティデザイン”という考え方だ。しかし今や「地域を盛り上げたいから、公民館のような箱ものをつくって盛り上がってもらおう」という考え方は終焉を迎えている。辺りを見回せば、コミュニティデザインを旗頭に各自治体で作りあげたものの、住民に使われず、打ち捨てられている公共施設のいかに多いことか。ランドスケープデザインを出自とする著者が、設計の中でデザインの限界を感じ、公園や地域を盛り上げていくのは設計だけでなく、コミュニティの構築・マネジメントまで含めてデザインすることがこれからの「コミュニティデザイン」であると主張する。

例えば、自然公園。ディズニーランドはキャストという存在がテーマパークを盛り上げ、人びとを楽しませている。しかし、あくまでも主役はコンテンツ。コンテンツが陳腐化すれば来園者は少しずつ減っていく。公園でNPOの主催するワークショップや体験教室などを開くことがコンテンツの代わりになり、継続的に人を来園させる動機になると著者は気づく。例えば、まちおこし。今のまちおこしは、イベントをやって一時的にまちに人が訪れ、街が潤うことだけを考えているのではないらしい。まちおこしプロジェクトを住民参加で行う場合というのは、プロジェクトの過程で生まれる課題解決のコミュニティが、祭りの後も活動を続けていくことを期待している場合が多い。たとえば、民間企業。鹿児島県の中心部にリニューアルオープンされたマルヤガーデンズは、各フロアにNPOが活動を行う空き地を用意した。空き地で活動するNPOはにとって、人の集まるデパートは市民会館などで活動するよりも人を集めることができるし、デパートとしてもコミュニティの活動に参加するために立ち寄ったフロアで購買が行われる、というwin-winの関係を築けている。

こうして見ると、コミュニティの芽を撒き、コミュニティの存在をもとに、コミュニケーションが生まれやすいアーキテクチャをデザインしていくコミュニティデザインという領域に大きな可能性が隠れていることに気づくだろう。コミュニティデザイナーは、まちの再生やいつまでも活気を持った施設の構築に不可欠だ。しかし、彼らの役割にも限界はある。本書でも書かれていたが、よそ者であるデザイナーたちはいつかはその場所を出て行く。こうしたコミュニティデザインの価値に共感し、持続的に活動していく人びとの集まりを作っていく必要がある。

「いま、地方で生きるということ」では、自然や地域コミュニティへの働きかけを地方で実践している人がいた。だが東京にいる僕たちはコミュニティの重要性を最終解のように唱えながら、それを自分の地域のために実践しない。東京との関連でこの本を読んでみると、都市とコミュニティの構造が見えてくる。東京をはじめとする都市部は人口が多く、地方と比べてコミュニティ活動をやろうと思えばできる環境であるのに、地方ほどコミュニティの復権に積極的ではない。それは、都市というのはコミュニティがなくとも成立できる形態だからだ。地方ではコミュニティがなければ人を吸引することができず、果ては経済活動が立ち居かなくなるという危機感がある。一方、都市部ではコミュニティという魅力がなくとも、仕事や機会を求めて人がどんどん流入してくるため、コミュニティがなくとも経済活動において支障はきたさない。このようにして危機感は感じることなく、都市部ではコミュニティがどんどん荒廃していく。

SFを持ち出すのは気が引けるのだが、想像力によって喚起させられる危機感もあるはずなので挙げておく。原作・士郎正宗、監督・神山健司『攻殻機動隊 Stand Alone Complex Solid State Society』という作品は、少子高齢化が進み、家族を持たないで老年を迎える人口の増加が社会問題化している社会を舞台に物語が展開される。身寄りのない寝たきり老人は、政府の提供する全自動介護システムによって介護を受けている。そこで描かれているのは、地域や親族関係という相互扶助のネットワークがなくなり、システムによってその機能が代替された社会だ。このSFで描かれた、現在の延長線上にある無縁社会のことや、阪神淡路大震災で、被災により生活していた地域から切り離されたことで孤独死を迎えてしまった老人たちのことを考えると、コミュニティの構築に無自覚な、大都市の住民こそ無縁社会の射程距離にいるのではないか、という気がしてくる。

僕は都市部のコミュニティ復権の鍵は、都市部の人びとと親和性の高いファシリテーション技術、つまり協働を促進する技術の習得にあると考えている。

自分たちの手でコミュニティを作りあげていくことが難しく、かなりのハードルがあることは事実だろう。では、この本で書かれたようなファシリテーションの技術が身に付けばどうだろうか。すべての人が身につけているわけではないが、アイスブレイクや他者紹介といった初対面のメンバーが集うミーティングの冒頭に、会話を活発にするために行われる手法などは、就職活動などで体験したことのある人は多いだろう。こうした技術は、都市部の会社員層にとってはなじみやすいものだろう。こうした協働を促進させる技術を各人が身につけることで、思いついた活動を実行に移せる可能はグンとあがり、ひいてはそこでの活動が継続して行われるコミュニティ活動になるかもしれない。

# 『いま、地方で生きるということ』

## 西村佳哲

文／原田俊

生き方や働き方を追求している著者が、東北でのボランティアの旅や九州でのワークショップツアーを通して、地方と呼ばれる場所で自分の考えをもって生きている人たちに話を聞いて、考えたことをまとめた旅エッセイ風インタビュー集がこの本だ。

すごく唐突なインタビュー集で、次の諸々はどんな人で、という説明はあれども、どういう文脈で話を聞こうとしているのかがわからない。旅の中で偶然キーパーソンに出会って考えが深化されていく感じを受ける。断片断片でハッとさせられる言葉があり、繰り返し読むと重要なポイントが浮かび上がってくる。自分の結論に持っていくためのインタビューではなく、話を聞く旅が終わっても著者自身の結論が提示されるわけではない。しかし読んだ人に深い印象を残す不思議な本だ。この、旅エッセイの中にインタビューが挿入される唐突さも、日常的に移動し人に話を聞くことを生活の一部にしている著者らしい、と考えるといつのまにか気にならなくなる。

### 仕事のない地方／仕事のある都会、は嘘

「彼は多くの人が「田舎には仕事がない」と言うけどそんなことはないんだ、と話していた。それは勤め先がない、つまりいわゆる会社のような求人口がないだけの話で、人手が足りなくてできずにいる仕事はもう山ほどあるんだと」(p.28)

ハッとしました？　いきなりの引用。僕はこれを読んで目から鱗が落ちた気がした。地方で生きていくにあたって、漠然とした想いでは生きていけないと思う。サラリーマン的世界観（＝どこかに所属して与えられたものをこなす）の人にとっては、地方は暮らしていけない場所かもしれない。それは他のところ(p.65)でも言及される、何かを持っている人が田舎では多い気がする、という話と連動するのではないだろうか。では、どのような想いを抱えて、地方で人は生きているのか。

### 地方に価値を見いだす人たち

会社や学校に行っても、最低限まわりに挨拶して終わり。雑踏ですれ違う人には目もくれない。こうした都会での日常に対し、遠野では人びとのすれ違い一つから「応答」が行き交う。「どこ行くんだ」「何しにいくんだ」「そうか、気をつけてな」遠野の文化財保護運動を通して移り住むことになった徳吉さん曰く、遠野の人たちは「物事への働きかけが身体から始まる」(p.123)という。人に対してもまず声をかける。そうした声の掛け合いが身体性のパフォーマンスを向上させることを知っているかのように。そうした地方の生活を経験すると、都会の素っ気ない関係の空気には戻れないそうだ。

また、屋久島で作家活動をしている星川さんは、地方に住むことで、都会の中では構築せざるをえない人との関係性をあえて断つことで、そういう関係性のない状態の、自分を見つめることができるところに地方の価値を見いだしているようだ。(p.247)

### 自然災害を契機に、人間が自立的に生ていく方法を手助けをする

僕は自然学校というものを知らなかった。自然学校とは自然体験活動の拠点で、そこでは冒険教育（＝「主体的にチャレンジ」し、「みずから一歩踏み出す力をつける」ことを目的とした教育）を行う。取り組む相手が自然であることのメリットとして、「自然は言い訳ができないので、比較的早めに自分と向き合える」ことが挙げられるそうだ。前述の星川さ

んの言っていることと繋がってきそうだ。

自然学校の先生で、震災以降は被災地でボランティアを行っている塚原さんは、災害に対して誰に聞くことなく自分で決断できる秘訣を聞かれて、自分に対する信頼があるからはじめての状況でも主体的に動ける、と答えている。それは、いつでも今まで戻ることのできる場所を持ち、そこから（冒険教育を通して）試行錯誤して、正しい方向を得てきた自分のやり方への信頼と言っても良いだろう。これは凄い示唆に富んだ話だと思うのだ。個人の地方での生き方を巡る話が、教育のあり方や人間の自立について展開されていくのだ。

## 文化的なものを構築しようとしているひとたち

秋田でローカルビジネスを興し、秋田の文化シーンの中心にいる笹尾さんは、かつて秋田の土地に居続けることを忌避し、京都に出た。しかしそこで出会った地元を愛してやまない人たちから、自分は生まれた場所である秋田が均質化しつつあることを嫌がっていたのだと気づき、均質化に対抗すべく秋田に戻り、その場所を誰かにとってどれだけかけがえのない場所にできるか、をテーマに人びとを巻き込んでいく。

「経済的な意味合いとは違う豊かさは、どれだけその場所に誇りを持てているかということと、身近な人をどれだけ尊敬できているかということ」(p.167)

同じく秋田でデザインを通して地域に関わる矢吹さんは「東京に行かなかった選択をなんとか肯定したい」(p.152) という。僕自身生まれも育ちも東京で、選択の中で、選択を通して生きてきたという実感が希薄なのだが、地方を選んだ人の持つ気概を垣間見た気がする。

## 都会という舞台

日々を悶々と暮らす人びとと、これらの人びとの違いを考えてしまう。僕が思ったのは、自分を持って人びとや地域、自然に入っていける人は地方で輝ける。都会と比べて、地方ではコミットメントの度合いを自分で選べる余地がある。その素地として、人びとがより身体的であったり、対自然の感性が研ぎすまされていることが挙げられるだろう。ヴィジョンがあり精力的な人は人を巻き込んでいく。これは地方だろうと一緒だ。ただ、都会では自分自身何か持っていなくても、労働力としてそれに参加できる。都会は人びとが集まり、活動する場所なのだ。ダンスを踊るべき舞台なのだ。人は都会にいるかぎり、踊り続けなければならない。嫌な書き方だが、踊っている限りは、自分自身が輝いている気になれる。考えてほしい。企業だってそもそもは一人の人間が興したものだ。一人の人間のダンスに共鳴し、一緒に舞台に立つことを選んだ人が次々と踊りに参加していって、大きな形になっていったのだ。冒頭でもあったが、地方では人手が足りないため、孤独なダンスを強いられる。地方で輝く人は、一人でもダンスを踊れる人だ。人の目を気にして踊れない人や、大勢の中に混じってダンスをしていたことを輝いていると勘違いする人は、地方では輝けないだろう。

## 余談、そしてまとめ

大筋とは離れるのだが、著者がかつて暮らしていたサンフランシスコの話が興味深かった。「生命の維持が難しい場所では人工的な仕組みがいる。」「それが強固でなくても生存していける場所（＝サンフランシスコ。引用者補足）には、システムから逃れたい人やより自由に生きて行きたい人が集まってくる。」(p.103) この雑誌の別記事で取り上げている都市型狩猟採集生活で考えると、都市の合理性が生み出す非合理性（＝く都市の幸>であるゴミ）によって狩猟採集民は生きている。つまりシステムから逃れたはずの人たちが、システムに依存することで生活を成り立たせている、という矛盾が生じてきている。都市も十分恵まれた土地なのだ。

そして厳しい土地であることが、ニューヨークのアールデコやドイツの哲学を生み出してきたという。

「こうした煩悶や祈りの一端が、僕らの接してきた文学にもなり、アートや音楽にもなってきたのだと思うと、より生きやすい環境を探していくことだけが是であるとはどうも言いがたい」(p.105)

このたびの震災を契機に、日本は「もし世界が 100 人の村だったら」で言う「そこに生まれただけで人生幸せな国」から「生きることが厳しい国」になっていくと思う（もともと多くの社会問題を内包していたのだが）。僕はニューヨークやドイツが生み出したものを肯定的に捉えたい。この震災、そして原発事故をふまえて僕らは何を残すのか、何を創造するのか。それが「問われている」のだと思いたい。

# ストレイテナー『STRAIGHTENER』

## バンド名を冠した原点回帰の通算七枚目フルアルバム

大多英之

アルバム通算7枚目にして、自らのバンド名を冠したフルアルバムである。

ストレイテナーは元々、ボーカル・ギターのホリエ氏と、ドラムのナカヤマ氏の2人で始動したバンドであり、追ってベースの日向氏・ギターの大山氏が1人ずつ加わって、現在の4人編成に至る。4人編成になってからは『Nexus』『CREATURES』の2枚のフルアルバムを出し、その活動を更に活性化させてきた。

そんな中で現在のバンドのコンディションがベストの状況になったことをメンバー全員が確信し、「俺たちがストレイテナーだ」という「覚悟」の表れとして、自らのバンド名がアルバム名に命名された。

本作、音的には「原点回帰」的な、デビュー当時の疾走感溢れるナンバーが揃い、切れの良いギターサウンドがカッコよく鳴り響く。ここ最近の作品に多かったキーボードをメインに使用した楽曲が本作では見られない。端的に言えば、スローテンポのバラードがないのだ。また、ラストの「VANISH -prototype-」を除き、エレクトロの要素もほぼ完全に排除されている。元々エモ系の疾走ギターロックを鳴らしていたストレイテナーが、今の4人だからこそできるそれを、最大限にまで引き出した楽曲が目白押しだ。それ故に、初めて聴くリスナーの方々にも非常に入りやすい作品に仕上がっている。

このバンドは洋楽、取り分けUS・UKのインディ・オルタナティブへの強い憧憬があり、そしてそれを吸収し、自分たちの音楽と組み合わせて昇華させるのが非常に上手い。本作に収録されている「VANDALISM -prototype-」・「LEAP IN THE DARK」・「CRY」など正にそれに該当する。

歌詞的には、ボーカルのホリエ氏もある雑誌のインタビューで答えていたが、「過ぎたことよりも、これから起こることや、これから見える景色に思いをはせた」と語る内容がメインとなっている。当初から直截的な表現をしない歌詞が多く、これは私見であるが、そこからリスナー各々がメッセージを自由に汲み取る形態の歌詞が貫き通されている。

ホリエ氏のインタビューを色濃く反映させているナンバーが本作1曲目に収録の「A LONG WAY TO NOWHERE」であろう。「心の言葉を信じ、まっすぐな眼で新しい世界へ踏み出せと」語りかける本ナンバーに、本作のへの強い意思が集約されている。

ここで本作の中で筆者のお気に入りナンバーを1曲紹介させて頂きたい。本作9曲目に収録の「CRY」である。

乾いたギターコードのリフでスタートし、各楽器隊が絶妙な掛け合いをするイントロが印象的だ。アンダーグラウンドでダークな曲調が続き、それがサビで一気に解放される。このメリハリが非常に格好良く、ラストの盛り上げ方は秀逸だ。メンバーが「今」だからできる全てをこの曲の中に閉じ込めている。

先日には、本アルバムを引っさげた「LONG WAY TO NOWHERE TOUR」のライブにも参戦することができた。本アルバムからの選曲は勿論なのだが、過去の楽曲からの選曲も多く盛り込まれており、ワンマンツアーということもあって、公演時間も約2時間という大ボリュームであった。相変わらずMCは少なめで、「とにかく最高のコンディションにいる自分たち曲をひたすら聴いてくれ」という意思が伝わってくる。特筆すべきが、今回のツアー、セットリストが公演毎にバラバラで、もう何が起こるか参戦者には分からない。よくツアーとなるとほぼ毎回同じセットリストになることが多いのだが（それを否定している訳ではない）、毎回異なる方が、参戦者の期待は大きく高まるというもの。過去の楽曲も含めて、全部が今のストレイテナーなんだという凛々しい姿を見せてくれた。

「A LONG WAY TO NOWHERE（どこでもない場所への長い道のり）」、ストレイテナーはその長い道のりを、「今の4人だからこそ最高にカッコいいことができるんだ」という強い信念を持って歩み続けていくであろう。

おおたひでゆき
ロック中心に音楽好き。邦楽なら、BUMP OF CHICKEN、ストレイテナー、ミッシェルガンエレファント、スーパーカー、等々。洋楽なら、UK・USのオルタナティブ・インディ系を中心に色々聴きます。本・漫画も好き。CD屋と本屋の行き来の時間が最高！
@bigmany1

タグ

ストレイテナー／ホリエ氏／インディーロック／ロキノン／楽曲解説

# 石川雅之『もやしもん』八巻

## 何かに夢中になる「楽しさ」への憧憬、後悔、希望

深川要

学生の頃から漠然と思っていたことがある。周囲の友人たちは口々に「あの頃は良かった」「充実していた」と言うけれど、私はいつだって退屈していた。

テニスサークルに入って飲み会もよくしていたし、講義の合間に麻雀をする仲間にも事欠いたことはない。学業だってそれなりにゼミに打ち込みもした。アルバイトも人より多くやっていたほうだろう。それでも、心のどこかでは醒めている自分がいることは自覚していた。どれだけ気持ちよく酔っている瞬間にも、「なんて無駄な時間を使っているのだろう」と無意識のうちに考えていた。

この物語は、菌を肉眼で見ることができる主人公、沢木惣右門直保とその仲間たちの某農大でのでき事を描いている。登場人物たちは皆、それぞれに若者らしく悩みを抱えつつも、描かれている彼らはいつだってとても楽しそうだ。

私が文系の出身だからなのかもしれないが、理系は学生時代に遊べないとよく言われていた。だが、彼らを見るとどうだ。醸造の実習という形であれ、味噌や醤油、酒などを仕込み、常にその瞬間に夢中だ。なるほど、確かに彼らは普通に遊んではいないだろう。だが、普通に遊んでいた私は「楽しんで」いただろうか。

「楽しさ」とはどのような時に感じるだろう。遊んでいるときだけに感じるものだろうか。そもそも「楽しさ」とは何か。私には「楽しさ」は「退屈していない時に感じるもの」と思えて仕方がない。何かをしているときに「今、楽しいなあ」と意識することはあまりないだろう。「あの時は楽しかったなあ」と後から振り返って思うことがほとんどではないか。だとすれば「楽しさ」とは「何かに夢中になっている瞬間」と言い換えることができるだろう。「何かに夢中になっている瞬間」それは遊びだけには留まらない。人によって夢中になるものは違うだろうが、その中の一つに学問が挙げられるだろう。興味を持つことができないことを学ぶのはとても辛く苦しいものだが、自分が興味を持って自発的に行う学問は時間を忘れさせる。

作中の沢木達にはそんな意識はないだろうが、彼らは遊んでいるようでいて立派に学問をしているのだ。1巻で酒の密造事件を引き起こした2年生コンビ美里と川浜に、教授である樹慶三はこう語る。「学生が己の興味から発した実学の美を堪能した。君達は既に真の研究者だ。」この言葉は、この作品を見事に一言で言い表したものだろう。人は普段の生活において何かしら疑問に思うことがある。その疑問こそが学問の始めの一歩であり、自らが納得いくまで突き詰めて調べ、考え、結論を出す。「□□学」や「△△学」などと大仰な名前がついていなくても、人は皆学問をすることができるのだ。そしてそのように何かを考えているときは、きっと退屈を感じることもないくらい夢中になっているだろう。

私は∞巻のある見開きのページを見たときに、なぜか涙を零した。そのときは何故かしばらくわからなかったが、今思うと理想に近い学問を行い、それを遊びにして全力を傾けている沢木達を羨み、私自信が過ごしてきた過去を後悔し、そしてこれからの自分の生き方に何か答えを得たような気分だったのだろう。そう。周りに流されるだけの楽しみではなく、自らの疑問、興味を礎とした思考に没頭する。それを心がければ、これからの人生はきっと私にとって本当の意味で楽しいものになるのだろう。

ふかがわかなめ
1986 年生まれ。明治大学政治経済学部政治学科卒業。現在は某金融会社で経理を担当。趣味は読書、ネットゲーム、多少のスポーツ。あとはとにかくビールを飲むこと！最近ふくよかになってきたお腹周りをどうするべきか考え中。
@Augustdrunker

タグ

菌マンガ／農大の学生生活／生きた学問とは／本当の「楽しさ」／文系大学生の退屈さ

# 羽田圭介『「ワタクシハ」』

## 祭りの主体は何か。「通過儀礼」としての就活

原田 俊

一気加担に読み終えた後にまず思ったのは、この小説の抱える背景の大きさと、多面的な事象を包み込むようにつなげ合わせ書ききった著者の筆力への感嘆だった。ひとまずここは、セオリーに従いあらすじを述べることにしよう。

中学生でテレビ局の主催するギタリストオーディションに優勝し、ギタリストと学生の二足のわらじで暮らす主人公の太郎。そのままギタリストとして生きていくこともできたが、まわりに流されるように就職活動を始める。今までやりたいことのなかった者が、急に目覚めたかのように仕事や将来やりたいことについて語りはじめる「通過儀礼」としての就職活動を太郎はおかしいとあげつらう。参加者でありつつも就活のしくみについて批判的な視点は、自分がある領域のプロとして給料をもらっている経験によって作られている。批判をしている時点では太郎は就活にとって部外者だった。しかし他者に対してメタ的視点を持っているからといって就活は上手くいかない。太郎は次第に就活という森の奥深くへと入っていく。就活の世界は評価・査定結果のフィードバックのない世界だった。こうした不条理さが学生に与える悩みは、門番のいない門をくぐるべきか否か正解のない問いに迷い続けるカフカの小説、「掟の門」のようだ。太郎のかつてのプロフェッショナル観は「やりたいことを持っていてそのための努力ができるスキルに裏付けされた人」というものだった。しかし就活というゲームの内部に入ると、他者とスキルが変わらずやりたいことだけを抱えて邁進するしかない。内部に入り込んでいくうちに、太郎はいちプレイヤーとなり、かつての批判的な視点を失っていく。

この小説では若者の「自分は何か特別なものを持っているのではないか」という自意識にも焦点を当てている。それはかつてギタリストとして名を馳せた主人公・太郎だけに特別な感情でない。自分には何かがあって「努力すれば何とかなるのではないか」という恋人・恵の愚直さを太郎は批判するが、「頑張れば報われる」神話を信じていたい太郎＝我々もいる。

また地方での就活経験や地元での交流で、太郎が社会階層の存在に気づくシーンがある。下からは見えて上からは見えない階層のリアルな存在を目の当たりにする。このように、自分の安住する世界を離れる事で世界は広がり、他者との対話の中で多くの気づきを得ていく太郎。この小説が清々しいのは主人公の心性が世界に開かれていることに依っているところが大きいだろう。

同じ学年として入学しただけなのに、同じ時期に同じように就活を進めていることに疑問を感じつつも、友人や恋人を「自己の鏡」として見ることで、太郎の方向性や考え方は変わっていく。自分が失敗したとき、かつて自分が持っていた多様な可能性に思いを巡らす太郎。就活が終わり、友人の決着のすべてを自分の選択だったとしても認められる太郎。学生時代をまったく異なる価値観で過ごした他者同士が、就活という共通の「通過儀礼」によって「戦友」として相互理解できるようになる。こうした変化は、通過儀礼によって共通の思考様式と振る舞いを強いられたことによるのか、そもそもの個々に大きな違いがなかったからか。

通過儀礼に諾々としたがうひとは、何を想像して、そのしくみに乗っかることを呑んだのだろう。伝統的な価値観だったり、同調圧力だったり、システムのもつ安心の誘惑だったりと色々とあるのだろう。

どうみても不合理な就活という通過儀礼を人びとに継続させる「神」は、日本型雇用というシステムだ。日本型雇用はかつては今後数十年の人生の安寧を保証していた。だからこそ人びとは不条理に耐え、自身を成型しシステムに適合させた。しかし、日本の斜陽化に伴い、この「神」への信仰は揺らいできているはずだ。にもかかわらず、未だにとらわれている人びとが自分も含め多いように感じる。信仰をやめれば、通過儀礼もなくなるのにそれでも止めないのは、システムの提供する安心感や、誰かの決めたルールに従って動く事が楽だからだろう。他律的な自己が見え隠れする。

ここではこの他律性の存在について指摘するだけにとどめておくことにしよう。

はらだしゅん
1985年生まれ。大学では社会学を専攻。社会理論の観察の場としてインターネットが有効と思い、インターネット広告会社にSEとして入社。今は社畜化圧力に必死で抵抗しつつ、オルタナティブな生き方を模索中。
@sociolego

タグ

羽田圭介／就職活動／通過儀礼／日本型雇用システム／階層社会／努力は報われる神話／カフカ／掟の門

# BUMP OF CHICKEN「宇宙飛行士への手紙」

## 共有できる記憶と共有できない記憶の交錯

大多英之

人生で初めて出会った人と会話をする時、その人の生い立ちの話がでることは多いであろう。こんな学校を出て、こんな人と出会って、こんな場所に行って、などと…。

そしてそれは当然のことではあるが、人生で初めて出会った人との会話なのだから、言葉上でしか伝わらないことである。過去には絶対に戻れないのだから、想像上の世界でその人の過去を空想することになる。その時に人はどう思うであろう？　取り分け、人生で初めて出会った今回の人が、自分にとって大切な存在となった時を想像すると分かりやすいかも知れない。

そこに人は「儚さ」を感じるのだと思う。

大切な人の過去をリアルタイムで共有できないことへの儚さが、自分の中で巻き起こる。しかしそれはどうしようもないことで、「今」からリアルタイムで共有できる記憶を1つづつ紡ぎ出していくしかないのである。

「共有できる記憶と共有できない記憶」、この「宇宙飛行士への手紙」という曲は正にそのテーマについて唄っていると同時に、現在のバンプオブチキンの集大成的な曲と言える。

作詞作曲を手掛けるボーカル兼ギターの藤原が30歳を超え、これまでの人生を振り返って感じていることが正にこのテーマであり、それが曲中で相変わらず巧みな表現でリスナーの耳にそっと語りかけてくる。

藤原が唄う内容のテーマの1つとして、「死」というものが常にあった。最初期のナンバーに「ガラスのブルース」というものがある。そこでは、必ずいつか「死」の瞬間を迎えるのだから、その日に向けて1秒でも無駄にしてはいけない。今を精一杯に生きるんだ、という藤原の産声的な強いメッセージが込められている。

その後、中期に入ってくると、「embrace」・「飴玉の唄」と言った楽曲で唄われる、死なないもの（神様）は信じない、生きている人間のぬくもりに触れていたいんだと言う、ある種の安静・逃げ場を求めた表現が出てくるようになる。

そして、「宇宙飛行士への手紙」だ。この曲では「死」を意識するのは、生きている大切な人と出会えたからこそ生じるものであり、その人と共有するリアルタイムの時間こそが「死」をも超越した存在として自分を守ってくれると唄う。共有できる記憶が多ければ多いほど、それは自分を「死」から守る盾として強化されていく。

この死生観に触れたとき、私はある種の感動を覚えた。普段我々が接している大切な人との何気ない時間が、「死」をも超越した存在にまで昇華されていく。共有できない記憶が多くてそこに儚さを感じるであれば、それを超える分だけの共有できる記憶をたくさん紡ぎ出していけばいい。この素晴らしい真理に気付くことができたことに喜びを感じた。

歌詞にフォーカスした文章になってしまったが、この曲は当然のごとく楽曲としても非常に秀逸な作品に仕上がっている。ボーカルのメロディは勿論素晴らしいのだが、私個人として特筆すべき点は間奏部分である。完全にアドリブのギターの掛け合いになっているのだが、この途切れ途切れな感じのギター音1つ1つが、星々の輝きとでも言うべきか、流れ星の光とでも言うべきか…。とにかくそのように聴こえてくるのだ。そしてその1つ1つの音が、本作のテーマである共有できる記憶と共有できない記憶の交差のように私の心中には響いてくる。この曲のテーマを見事この間奏で表現しているのだ。

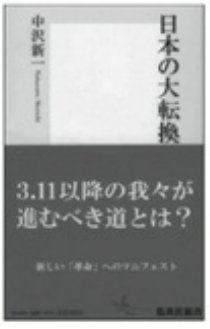
バンプオブチキンはもうかれこれ3年半程ライブを実施せず、黙々とレコーディングを続けて楽曲を書き溜めてきた。そしてついに今年の12月にその沈黙を破ってライブツアーが実施されることになった。

共有できる記憶と共有できない記憶という、今の藤原の中で究極のテーマを唄った「宇宙飛行士への手紙」が、ライブ中のバンドサウンドとして生音ではどのように表現されるのか。それを想像すると今からその興奮が冷めやらない。

おおたひでゆき
ロック中心に音楽好き。邦楽なら、BUMP OF CHICKEN、ストレイテナー、ミッシェルガンエレファント、スーパーカー、等々。洋楽なら、UK・USのオルタナティブ・インディ系を中心に色々聴きます。本・漫画も好き。CD屋と本屋の行き来の時間が最高！
@bigmany1

タグ

菌マンガ／農大の学生生活／生きた学問とは／本当の「楽しさ」／文系大学生の退屈さ




# 中沢新一『日本の大転換』

## 時代が書かせた筆跡

佐藤大介

福島第一原発事故の後、私たちは否応なく震災と原発を巡る言葉や論議に巻き込まれざるを得ない。原発を巡る問題が大きな政治的議題となって日常から遠ざかろうとする中で、今一度原発を「身近なもの」に取り戻すことはできないだろうか。3・11から三カ月が過ぎようとしていた矢先に、日本が進むべき新たな道を構想してくれた人がいた。人類学者の中沢新一である。

本書で中沢は日本人が直面する二つの重大な問題、経済的効率性や核技術への感情的反発を越えた原子力発電と、原発以後の再生可能エネルギーをめぐる問題の本質に、「エネルゴロジー」（エネルギーの存在論）という視座をもって、明確な言語表現を与えている。「エネルゴロジー」の根底には、中沢が「カイエソバージュ」で滑らかに展開して見せた、「贈与」と「圧倒的な非対称を実現する対称性」の両概念がある。

有史以来人類は媒介、交換、贈与の思考様式をもって「全体性の秩序」を保ってきた。古くは動物と人間、文化と自然の関係に「神話」という語りを通して、世界に対称的な関係を作り出そうとした。現実的には非連続的に分断されたつながりに連続性を取り戻すために、神話の世界では動物は人間の言葉を話し、時に人間自身が動物となって動物社会の習俗や生活を体験し、彼らを深く理解しようと努めていた。人類の無意識に宿る「神話的思考」は世界の対称性の実現を目指していたのだ。そこには、交換や仲介、媒介といった象徴を巧みに操る「詩的生物としての人間」がいたし、「外部」に対する共感に満ちた理解と美徳が確かにあった。

しかし、現代を支配するのは暴力とテロルと自然の乱獲と地球温暖化が支配する、「圧倒的な非対称」である。

石油や石炭という古性代以来の植物の堆積利用は太陽からの放射エネルギーを媒介にし、火の発明は原子の自然に発生する化学反応を利用していたが、原発は決定的に異なる。核融合連鎖反応は人間で制御することのできない「外部」であり、太陽の中心部で絶え間なく起こる核融合を「無媒介」で持ち込んでいる。それは、自然が何重にも媒介された他のエネルギーとは、決定的に違うのだ。核融合という生態圏外部に属する現象は、本質的に「無媒介」であり、原発は人類のエネルギー革命の歴史の中で、類例のないテクノロジーなのである。

生態圏の外部につながりをもつ技術の作品が、社会内部に浸食し自閉してゆく構造は資本主義の発明と一神教の発生にも重なる。

人間が人格的交差によって繋がっていた時代、深い基礎には自然や土地に対する贈与性と共感覚があった。しかし、社会の外部からやってきた資本主義は、その贈与性を食い破り、内部で自閉していった。市場が社会を包摂する経済活動に、具体的な人間の心のつながりは一切不必要である。生態圏を超越する資本主義という「絶対者」は、数千年前に誕生した全てを超越する一神教の成り立ちと同型であり、両者は現在の科学技術文明に決定的な影響を及ぼしているという。原子力技術は、その一神教的な技術の作品なのだ。

エネルゴロジーに基づく中沢の論考は原発の克服を通じ、さながら経済活動の問い直し、贈与の可能性、神話的思考の再考と壮大な文明論を語っているようにも思える。原子力発電の脱出と自然エネルギーへの転換に向けて主張は揺るぎなく、来るべき可能性は「生態圏を根底で支える贈与性」だという。それは、媒介と贈与の次元におかれた自然エネルギー、農業と贈与を再考した「太陽と緑の経済」の提示、地域コミュニティの再考だ。

政治状況が混迷を極める今日、大きなビジョンをもって可能性を現実に変えるにはテクノロジーありきではない、確かな理念と深い哲学的思考が必要なのだ。一人一人が人生の選択の余地を握っている。本書は今切実に読まれるべき書であると思う。時代が描かせた、筆跡だ。

さとうだいすけ
豊かさと地域社会の可能性という観点から、住民がいろんな顔と役割をもつ徳島県上勝町の取り組みを書きました（情コミジャーナル優秀論文賞）。いつかライターになるのが目標！普段は橋梁メーカーに勤める社会人です。
@eninarutiiki

タグ

中沢新一／3.11／原発／エネルギー問題／贈与性／資本主義と一神教／緑の党

# 村上春樹／河合隼雄
# 『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』
## 物語の持つ暴力性。正しさの不確かさ

原田 俊

この対談集は、1995年11月、京都にて小説家の村上春樹と臨床心理士の河合隼雄の二人の、二回に渡る対談を文字にしたものだ。1月に阪神・淡路大震災、2月に地下鉄サリン事件が起こり、時代は混迷を極め、人びとも進むべき指針を失っているかのような有様だった。対談時は、村上春樹は「ねじまき鳥クロニクル」第三部を書き終えたばかり。この後に、地下鉄サリン事件の被害者60人の声を集めた「アンダーグラウンド」や、オウム真理教の元信者たちにインタビューし被害者と加害者の同質性を捉えた「アンダーグラウンド2 約束された場所で」に取りかかる。そういう意味で、彼ののちに続く問題意識が見え隠れしている。

さらには、村上春樹の初期作品に出てくる「羊男」とは何の象徴なのか。彼独自の言い回しで用いられる「井戸を掘る」行為、そして「壁を抜ける」行為とは？　身体性と文体の関係性についてなど。また、阪神・淡路大震災でのボランティア活動へのコミットメントと、日本社会からのデタッチメントといった話題が扱われ、3.11＝東日本大震災を受けた今の我々にとってもアクチュアルに、切実な響きを持って迫ってくる。

とりわけこの対談集の中で私が取り上げたいのは、オウム真理教というカルト教団の信者だけでなく、日本の社会で正常と看做されている人たちすらも欲している「物語」について、そしてその暴力性、物語が内包する正義／悪の問題についてだ。この水脈は、のちの『アンダーグラウンド』『アンダーグラウンド2』に続き、さらには300万部を突破した大ベストセラー『1Q84』にまで脈々と受け継がれており、それが最初に顕現したのがこの本というわけだ。

河合隼雄氏の著作は恥ずかしながら、これが初めてとなった。日本で初めてユング派精神分析を学び、箱庭療法をはじめて日本に導入した事で知られるが、この対談では最上級の聞き手として、平易な言葉を使いながらも村上春樹の内奥を聞き出す事に成功し、かつ人間と社会の出会うところで生まれる病理性について豊かな知見を披露している。彼については、別の機会でぜひとも取り上げたいと思う。

私はかつてブログで『アンダーグラウンド』を取り上げ、オウムの犯した巨大な暴力は、自分自身の「物語」を紡ぐ事の難しさ（＝自我の確立の難しさ）から他者の用意した「物語」に依存してしまった人びとによって引き起こされた、という村上春樹の仮説を肯定している。確率的に人びとを襲う巨大な暴力の前には個人は無力であり、被害者に私たちがしてあげられる事など一見何もないように見える。が、そうした状況で人びとを救いうる新たな「物語」のために言葉を尽くすことにこそ価値がある、と言った。だがどうだろうか。物語というものは人を惹き付けるが故に、力を持つ。そしてその方向性は、一概に正義／悪とは言えないのである。

『アンダーグラウンド2』の中で、村上春樹は元信者たちに執拗にある質問を繰り返す。「あなたはもし麻原に命令されたら地下鉄でサリンを撒いたか」。人びとはそんなことはしないと言うものの、「物語」や同調圧力に迫られ、主体性（＝論理的思考）が揺らぐ瞬間があることを述べている人もいる。逃げられない状態に置かれ、「君しかできない」と使命感に訴えかける。

「人を行動に駆り立てる原動力のようなものについて考えるとき、論理的思考というのはきわめてやわなものじゃないかということなんです。」

物語は万能ではないし、間違っている事もある。広島、長崎に原子爆弾を落とされていながらも、原発というものを取り入れなければいけなかった背景に、効率化による豊かな生活という「物語」があり、私たちはそれに抗うべきだったと述べた、カタルーニャ国際賞でのスピーチは、原発批判であり、かつシステムに取り込まれてしまいがちな個人への批判であった。我々は今こそ村上春樹の問題意識の起源に触れ、その水脈を受け継いでいかなければならない。

はらだしゅん
1985年生まれ。大学では社会学を専攻。社会理論の観察の場としてインターネットが有効と思い、インターネット広告会社にSEとして入社。今は社畜化圧力に必死で抵抗しつつ、オルタナティブな生き方を模索中。
@sociolego

タグ

村上春樹／河合隼雄／アンダーグラウンド／オウム真理教／地下鉄サリン事件／物語／日本社会の病理

# 編集後記

この雑誌の特集で、東京の多様性、そして多様性によって近くで生活をしながらも決してわかり合えない人びとについて取り上げることにした時、まさかこんな展開になるとは思わなかった。そもそもは、僕がサイバーカスケード＝インターネットでの炎上について調べていたのが事の発端だった。サイバーカスケードについて取り上げたインターネットの古典、キャス・サンスティーン「インターネットは民主主義の敵か」を読むと、似た趣味や思想を持った人びとの集まるインターネットコミュニティの弊害について延々と述べられている。サンスティーンが言うのは、インターネットは時間や地理的条件を超えて、同じ考えや志向を持つ人びとが容易に集う事を可能にした。だが、あまりにも同質的なコミュニティの中では差異をつける事が難しく議論が過激な方向に傾くことが多い。異なる考えの人の話を聞かず、議論が過激になりがちなインターネットコミュニティの隆盛は、果たして民主主義にとって良い事なのか。このように述べるサンスティーンの希望は、討議的フォーラムという公共的な話し合いの場により、インターネット上で公共的な議論が実現されることである。

このような視線をインターネットから都市に向けた時、都市に暮らす人びとは、職業や地域というネットワークにおいて自らの志向や考えを共有することはできず、むしろ趣味や同質性で繋がれるソーシャルメディアやリアルコミュニティを活用している事が多いように思えた。そうであれば、隣で仕事をしている人の考えている事について、理解する事はとても難しいように感じたのだ。この特集に登場してもらった論者たちには自分の得意な分野について語ってもらうことをお願いした。僕はそれらを統合すべく、慣れないコミュニティの本を読みあさってみた。

話は変わって、ソーシャルメディアの出現によりGoogleのページランクを頂とするアルゴリズムによる創発現象の限界が取り沙汰されるようになった事は記憶に新しい。もちろんページランクは未だに我々の調べたいものをweb上から確実に見つけ出してくれる。しかし、アルゴリズムによるレコメンデーションは未だ意識化されない欲求や、偶然性を取り入れた結果を示す事ができていない。私はこのセレンディピティをテーマに、レビューでは自分の好きな本というよりも、他者に勧められた本を選んでレビューする事にしてみた。すると面白い事に当初はバラバラだった「多様性な個が集まる都市において発生する断絶」を乗り越える方法を探る特集と、偶然選んだ本のテーマたちが共鳴し出したのだ。

就職活動での若者の苦悩や成長を描いた小説は、通過儀礼の信仰の対象を描いてしまった。東京では「日本的雇用システムによる安心な生活」という物語を生きるべく、人びとが絶えず流入している。この物語（＝神様）は就職活動という「通過儀礼」を人びとに強いている。人びとは信仰のようにその物語を手放さない。村上春樹は『アンダーグラウンド2 約束された場所で』において、オウムの信者が麻原の作りあげた物語を信じているのと同じくらい、他の人も日本的雇用システムを信じている日本の病理性を取り上げた。僕の周りでもから身体の調子を崩して会社を休んでいる友達が何人か居る。上の人はすぐ「やる気がない」とか「意気地がない」と言うが、そうではないだろう。そもそもこのシステムや物語が間違っているのだ。それに自分を当てはめていこうとするから無理が生じる。しかも「正しい道（＝物語）からはずれないように」と思い込んでいるからなおさら自分を追い込んでしまう。就職活動は「捉の門」だが、日本的雇用のシステムは規律訓育型権力のかたちを持ち、人びとに正しい／正しくないコードを埋め込む。きちんと就労できない自分のことを「正しくない」と思わざるを得ない。上手くいかなくても、それは自分のせい。上手くいったら、日本的雇用システム万歳。オウムにおける麻原の力／自分の努力力の欠如、の使い分けとまったく同じだ。村上春樹が警鐘を鳴らしたのは、カルトも企業も同じメンタリティを持つ日本社会のいびつさだ。彼は教祖の命令でサリンを撒いた実行犯と、サリン被害に合いながらも会社に行こうとする人びとに、それを見いだしている。もっとも、この震災以降のセカイで、我々が不思議と安心して暮らしているつもりなのも、このシステムに対する信頼によるものなのだろう。色々な言葉が出てきて申し訳ないのだが、ここではシステムが物語の役割を果たしている。このレールに沿っていけば幸せな人生を送れるはず、というストーリーだ。

資本主義的合理化と日本型雇用システムは、地縁や血縁といった繋がりに対して利益を生み出す限りにおいてでしか価値を見いださない。資本主義は物流のハブとして大都市を消費と生産の拠点にし、地方はそのノードとして機能する。ここにネットワーク的であり、かつ中央集権的な階層モデルが誕生している。その性質上、大都市は活動の場として自己を定義し、自らの物語を実現する者、その物語に参加する者が集う場所になっている。そうした活動の場を求める人びとが絶えず流入する事により大都市は潤い続ける。だがその結果、コミュニティは疎かにされ、無縁社会での孤独死という恐怖が水面下で進行している。一方、地方では自然、身体性、コミュニティなどが見直され、自分らしさやコミュニティを復権させる事で地域を活発にしていく機運が高まっている。そうした働きかけの成果が、ご当地検定であったり、地ビールを媒介にしたコミュニティだったりするのだろう。こうした取り組みをやっている人はAKBのファンの気持ちや、聖蹟桜ヶ丘という聖地を巡礼する人の気持ちはわからないかもしれない。英語という言語を習得しようと頑張ろうとする人がいても、その事を話し合う共通言語がない状態だ。こうした状態に、少しでも抗う事ができるかもしれないと思い、雑誌を創った。それも、総合的な批評誌を。もちろん、これがすべての問題を解決するマスターキーではないことはわかっている。しかし、この雑誌が少しでも状況を打開するワンダーワードであらん事を切に願っている。

最後にこの雑誌の制作にあたり、執筆・デザインにご協力頂いた皆様、そしてこの雑誌を手に取ってくださった皆様に心よりお礼申し上げます。Vol.2の発刊に向けて頑張っていきたいと思いますので、今後とも何卒よろしくお願いいたします。

## 執筆者一覧（敬称略／五十音順）

**秋庭奨** あきばしょう
1986 年神奈川県生まれ。明治大学情報コミュニケーション学部卒業。大学在学中にドイツのフリードリヒ・シラー・イエナ大学で 1 年間交換留学を経て、現在某メーカーに勤務。海外 ( 特にドイツ ) への想いは強く、いつか仕事で世界を飛び回るビジネスライフを送る夢を描き、奮闘中。

**izumi-**
1985 年生まれ。福岡県出身の 26 歳。大学では社会学を学ぶものの、現在は出版社において法務を担当。趣味は DJ。好きな音楽はクラブミュージック全般だが、AKB48 の女ヲタとしての活動も欠かさない。「推しメン」は大島優子さん。
@izumi_32,AKB48 専用アカウント@123akb48

**@wintermuting**
生粋の茨城県民であったが、白いマンマにしょうゆをかけるべく上京し、Linux にグレナデンシロップを塗るだけの簡単なお仕事に従事するリーマンです。安易な略語が嫌いであり、Traktor のsyncボタンを押すのが好きであり、人の食事の映像を編集する遊びをするのだが、HDD 容量が圧迫されており、泣く泣く何かを消す。
http://flavors.me/wintersuite/

**大多英之** おおたひでゆき
１９８５年生まれ。ロック中心に音楽好き。Ｊロック、UK・US オルタナティブ・インディーを中心に色々聴きます。本・漫画の雑読も好き。神社仏閣も好き。あてなし散歩も好き。ガリガリのため虚弱体質に見られがちだが仕事は皆勤賞を続投中。何かでかいことをいつか必ず…実現させます。
@bigmany1

**佐藤大介** さとうだいすけ
町の取り組みを書きました(情コミジャーナル優秀論文賞)。いつかライターになるのが目標！普段は橋梁メーカーに勤める社会人です。
@eninarutiik

**澤紀和** さわのりかず
岐阜県高山市出身。斐太高校卒業。現在、明治大学大学院在学中。大学に入学後、犯罪や暴力といった社会学的テーマに関心を持ちはじめる。好きな思想家はミシェル・フーコー。最近の悩みは、旧友に会うたびに「もしかして太った？」と訊かれること。
@sawern

**根子敬生** ねこたかお
1985 年生まれ。愛媛県出身。グラフィックデザイナー。
@TKNECO

**原田俊** はらだしゅん
1985 年生まれ。大学では社会学を専攻。社会理論の観察の場としてインターネットが有効と思い、インターネット広告会社に SE として入社。今は社畜化圧力に必死で抵抗しつつ、オルタナティブな生き方を模索中。
@sociolego

**深川要** ふかがわかなめ
1986 年生まれ。明治大学政治経済学部政治学科卒業。現在は某金融会社で経理を担当。趣味は読書、ネットゲーム、多少のスポーツ。あとはとにかくビールを飲むこと！最近ふくよかになってきたお腹周りをどうするべきか考え中。
@Augustdrunker

---


# WONDER WORD vol.1

2011 年 11 月発行

| | |
|---|---|
| 編集／発行人 | 大多英之、原田俊 |
| デザイン | 根子敬生 |
| 表紙写真 | 伊藤佑一郎 |
| 印刷 | 株式会社ポプルス |

問い合わせ：@WONDERWORD_vol1

# WONDER WORD vol.1

http://p.booklog.jp/book/41802

編者 : sociolego (@sociolego, @bigmany1)
編者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/sociolego/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/41802

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/41802

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.